せとぎわ神話

ネッシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
せとぎわ神話

【Ｎコード】
Ｎ１８５９Ｌ

【作者名】
ネッシー

【あらすじ】
それは、神々がまだいっぱいいた時代。
美しい地球に育まれた複雑な生態系の中、人々は強く生きていた。
その内の１人、忘れられた英雄と小さな神様が、世界を救うために、災いが具現化された生命体「災獣」を倒していく物語。
好きでやっているのではない、王様がパンドラボックスなんていう迷惑な箱を開けちまいやがって下さったために嫌々やっているのだ。
「涙」は知りませんが、とりあえず「笑い」の要素は入っている世界史ファンタジーです。

ヒトだけでなく、独自の生態系を持つ個性豊かな動物（生物）たちも活躍します。
世の中の理不尽や悪を爽快に斬り裂きながら、英雄ヒー郎が世界を救う！！！

第1話　ザ・プロローゲスト（前書き）

小説を書くのはこれが始めての初心者です。
一応、色々勉強したつもりですが、改善した方がいい部分とかあったら指摘お願いします。
完結までしっかり更新していこうと思うので、よろしくお願いします。

第1話　ザ・プロローゲスト

―神は、神ではない―

大破した機械仕掛けの施設の中、1人の探検服姿の青年が走っている。
薄暗く、狭い通路。　床や壁には鉄柱が倒れ、天井の蛍光灯は火花を散らしている。
青年は、傷だらけだった。　3つのお守りをその手に握り締め、必至に、ただひたすら走っていく。

―その神は、悪魔だった―

不意に通路が揺れる。　轟音と共に。　その振動で天井から瓦礫(がれき)が落ちていく。
転んだ青年の手からお守りが散らばる。　それを見る青年の眼差しは、とても強かった。

―なぜ？　なぜ悪魔だったんだ？―

拾い集めた3つのお守りを、青年は強く握り締めた。　それと同時

に、腰の通信機が鳴る。
ノイズがひどくて聞き取れない。　かすかに聞き取れるのは、銃声、爆音、そして悲鳴。
青年は、それに答えようともせず、ただただ強くお守りを握り締めていた。

―違う。　始めから悪魔だったんじゃない―

青年は立ち上がった。　傷の痛みなどもはや感じてはいない。
青年は走り出した。　転んでも、転んでも彼は走り続ける。
止めなければならない。　全てが失われようとしている。
誰かがやらなければならない。　守りたいものが、そこにある。

―もう一度、かつての輝きを、
あの楽しかった日々を・・・みんなの笑顔を―

青年がたどり着いた場所、天井の抜けた大広間。　青年は空を見上げる。
目の前に映ったのは、どこまでにも広がる黒煙。
青く、美しく、小鳥のさえずる平和な空の面影など欠片も無い。
あの空の向こう、広がる黒煙の先には、かつての平和は残っているのだろうか。
ふと、黒煙の中に一筋の光が見えた。　光はどんどん広がり、眩(まばゆ)く、そして強くなっていく。

青年は、すがるようにその光に手を伸ばした。
「・・・・・・救・・・世主・・・？」
広がる光は、青年と共に、世界を包み込む。

それが、最後。
全ての絶望は、あのときから始まっていたのだ。

それは、まだ神々が　いっぱい　いた時代。
中世、と言えば分かりやすいだろう。　そんな感じの時代だ。
大地には草木が生い茂り、小川を流れる水は清く、
そして大空は青く透き通り、数羽の小鳥がさえずっている。
多くの生命が、そこにはあった。　すぐそこを見れば、色鮮やかな蝶が優雅に舞っている。
海には多種多様な魚が群れを成し、　空を見上げれば、巨大な飛竜が威風堂々と飛んでいる。
もちろん、その大自然の中で、人々も強く生きていた。
街は活気に溢れ、いつも笑顔が絶えない。
ある者は商品を売買し、ある者は狩猟で糧を得、またある者は利権を得て指揮をとっている。
忙しそうだが、楽しそう。　そこにいる一人一人が、まさに生きている。
今まで、戦争や天災など、数々の災難が襲い掛かってきたが、
人々は負けずに努力し、発展していったのだ。

そんな時代、西洋の北国ヤウロッパの周辺では戦争が起こっていた。
木のあまり無い草原の真ん中で、鉄の鎧を着た１００人前後の歩兵部隊が槍を構えて、

鉄砲部隊に迫っている。
「くっ・・・どうしようもないな、この状況。
鉄砲部隊だけでは我らヤウロッパ軍に圧倒的不利だ・・・。」
鉄砲部隊はわずかに１０人。　敵の歩兵部隊との距離も近すぎ、絶体絶命を強いられていた。
「ふぅ、手間かけさせやがって。　でも、ついにここまで追い詰めたでぇ。」
ニヤけながら歩兵部隊の奥から出てきた、この関西弁の巨漢は、敵部隊の指揮官。
分厚い鉄の鎧を身にまとい、巨大な斧を物ともせず担(かつ)いでいる。
「今日という今日はホンマもんの勝利やぁ。　さぁ、どう料理してほしいか言ってみぃ。」
ジリジリと近づく歩兵隊。　鉄砲隊は後退する他なかった。

・・・その光景を城から見ていたヤウロッパの兵士は大慌て。　否、城内の職員全てが大混乱していた。
国王の仕事場、壁も床も石積みの粗末な部屋。　本棚や机、椅子に絨毯(じゅうたん)など、備品だけは立派に揃えてある。
「どうするんですか！！　我が軍が押されています！！　このままでは聖地が奪われてしまいますよ！！！」
国王側近の男性兵士が王様を怒鳴りつける。　王様の姿は石段の壁に隠れて見えないのだが。
「とりあえず援軍は送っておきました。　しかしこのままでは国の存亡が危ぶまれます！！
早急に臨時作戦実行か降伏して聖地を明け渡すか選択して下さい！！！　・・・・・・てかさっきから何してんですか！！！」
兵士が壁の裏に回ると、そこには、怪しげな宝箱を前に震えている王様がいた。
「でっ！　すっ！　かっ！　らっ！　そんな得体の知れない物頼りになりませんって！！！」

あきれたように怒鳴る兵士に勢いよく振り返った王様は、兵士に向かって怒鳴り返した。
「そんなの分かんないじゃないのよ！！！」
王様は女性口調の男性である。　いわゆるオカマなのだが、格好はしっかり、ふわふわした赤い羽織。
王冠も男性用。　しかし髭は綺麗に剃ってある。　やや色黒で肌も綺麗。
・・・なのだが、今は状況が状況なため美容に気を遣っているヒマは無い。
化粧もしていないため、ただの中年のオッサンである。
「いい？　こういう宝箱っていうのはね、いざというときに願いを叶えて・・・」
「いやいやいやいや！！！　宝箱は魔法のランプじゃないですから！！！　てかそれ川に流れてきたのを拾っただけでしょう！！！
どっちかって言うと巨大な桃に近いわけで、今赤ん坊出てきてもしょうがないじゃないですか！！！
それすらも起きたら奇跡ですよ！！　水に浮いていた以上、どうせ空箱です！！！　やたら軽いですし、箱もヤスモノでしょう！！！
そんな非現実的なことより作戦選択の方が重要です！！！　さっさと・・・」
「うっさいわね！！！　じゃあ見せてあげるわよ！！」
激情した王様は勢いよく怪しげな宝箱に手をかけた。

ちょうどその頃、戦場にて指揮官が歩兵部隊に命令を下した。
「やられ方が決められないなら、好きにやらせてもらうで。　歩兵部隊、やれ！！！」
その掛け声と同時に歩兵部隊は、一斉に槍を構え突進する。
「くっ・・・ここまでか・・・。」
ヤウロッパの鉄砲部隊は諦めの表情で固く目を閉じた。
先頭をきる歩兵が大きく槍を手前に引き、渾身（こんしん）の力で突きつける！

「ぐっ・・・ぐぁぁあああああああ！！！！！」
広い草原に響き渡る悲鳴。
その痛々しい叫びを聞いた鉄砲兵の１人が、恐る恐る目を開く。
鎧を着た男が倒れていた。　どうやらやられてしまったようだ。
しかし、ふと目を脇に向けると、その男が持っているのは槍。
鉄砲兵は混乱気味のまま仲間の数を確認する。　１０人。
その全員が固く目を閉じていた。

「ヒーローは遅れて登場するもんだぜ。」

不意に背後から聞こえた声。　鉄砲兵は思わず振り返った。
「ヒ・・・ヒー郎さん！！！」
希望に満ち溢れたその声に、鉄砲部隊の全員が皆振り返る。
「ヒー郎どの！！！？」
「ヒー郎さん！！！　よ、良かった、助かった！！」
「来るのが遅いですよ！！」
ヒー郎。　そう呼ばれた１人の青年が、輝かしい日の光を浴びてそこに立っていた。
体を覆う橙色（だいだいいろ）の鎧は、エースの証。
ほそマッチョの体形は鍛え抜かれた肉体の証明。
兜など不要とばかりにその茶髪が日に照らされ黄金に輝いている。

「こんないいところで、また来たかオジャマ虫め！！！　やれ！！
　このまま勢いで蹴散らすんや！！！」
格好つけたヒー郎に対し、怒りの表情で指揮官が歩兵部隊に命令を下した！
・・・が、周りに味方は誰もいない。
強いて言えば、足下でタンコブつけて目を回している歩兵１人だけがそこにいた。
「・・・・・・・・・・・・・・あれ？」

指揮官が振り返ると、すでに小さく見える歩兵部隊がスタコラサッサと逃げ走っている。
「・・・テメェら逃げてんじゃねぇよ！！！　戦え！！！　オレらの聖地が
あんなクソ宗教信じてるような奴らの領土になっとるんやで！！！
　取り返したいと思わんかいな！！！」
歩兵部隊たちは聞く耳持たずに逃げ続ける。
「真面目にやれよ！！！　今度の遠足のおやつ代１５０円までに下げるぞコンニャロー！！！」
指揮官がそう叫ぶと、歩兵部隊一行はクルっとＵターンして全力疾走で戻ってきた。
逃げたときの３倍以上のスピード。
「そ、そうですね。　やはり聖地は取り返さないと！！」
「まさしく！！　あの場所は我らにこそ相応しい！！」
「その通り！！　決しておやつが理由ではありません！！」
戻ってきた愉快な歩兵たちを横目に、指揮官は力の抜けた溜め息をつく。

「面白ぇじゃねえか。　まとめて相手してやる。」
ヒー郎は、盾に仕込まれた鉄剣を抜き、戦闘体勢に入る。
「やっちゃって下さい英雄様！！」
「よっ、天下の英雄バンザイ！！」
「”天下の英雄”と呼ばれたその力、見せつけてやって下さい！！」
調子に乗った鉄砲部隊がヒー郎の後ろで取り巻きのように騒ぎ出す。
「馬鹿野郎、お前らも戦うんだよ。」
真顔で。
「・・・ですよねー。　ささっ、お前らも照準照準。」
都合のいい鉄砲部隊は、ヒー郎の後ろで半笑いしながら鉄砲を構えた。

「さっ、どうだ？　最期に言い残す言葉はねぇか？」
あざけるような目で指揮官に問いかける。
指揮官は、苦しい顔でヒー郎を睨みながら言った。
「・・・お前に聞きたいことがある。」
「ほう、何だ？　答えてやるよ。」
ヒー郎は剣を下ろして指揮官を睨み返した。
「お前・・・いつから英雄になったんや。」
「テメェは知らなくていいんだよ。」
「てかどっから来た？　このへん隠れる場所無いで。」
「テメェは知らなくていいんだよ。」
「お前最初から答える気な・・・」
「テメェには答えなくていいんだよ。」
「・・・・・・地味に凹んだで、今の一連のセリフ。」

「さぁ、質問タイムは終了だ、いかせてもらうぜ。」
ヒー郎は再び剣を構えた。
「何も答えてもらってないけどな、その代わり今日という今日は決着つけさせてもらうで！！」
指揮官は大きな体に見合う巨大な斧を大きくふりかぶった。
２人の宣戦布告と同時に、１００人の歩兵部隊、１０人の鉄砲部隊の手にも緊張がはしる。

「いくで！！　全員突撃ぃ！！！」
指揮官のその一言で、歩兵部隊が一斉に突進を開始した。
ヒー郎はそれを確認すると、
「いいな？　後方支援は頼んだぞ。」
と、背後の鉄砲部隊にささやき、単独で１００人を超える歩兵部隊に突撃していった。
最初に現れたのは最前線。　１０人の槍兵が、くの字の隊形で集団

突進を繰り出してきた。
「お前お得意の戦術か。　そんなもんとっくに見飽きてんだよ！！」
ヒー郎は高くジャンプし最前線組を飛び越えると、背後から最後尾を剣で殴り倒した。
「ぎょわっ！！」　「痛った！！」
最後尾の2人が気絶し、残りの8人が慌てて振り返る。
すると、突然の銃声。
「ぐふっ」　「あだっ」　「ぎょえっ」
先頭3人の兜を鉄砲部隊が狙い撃ったのだ。
その3人も、後頭部を強く撃たれた衝撃で気絶して倒れる。
取り残され、動揺した残りの3人に、ヒー郎の剣と鉄砲部隊の弾丸が襲い掛かる。
「ちょっまっ！！」
素早いヒー郎の動き。　気が付けば目の前に剣が。
「ぎょわああ！！！」
ヒー郎の横斬りで1人は殴り倒される。
「ウソでしょウソでしょ！？」
前と後ろを交互に見て、1人目同様に動揺する歩兵。
後ろのヒー郎の方を見た瞬間、後頭部にグキッと刺激が。
そのまま2人目も無言で倒れた。
「そんな！！　1人にしないでーっ！！」
取り残された1人。　眼前には突撃してくるヒー郎の姿。
悲鳴をあげているうちに、顔面を剣で殴られ、後ろによろめいたところに、後頭部を弾丸で強打し、
「また・・・また給料下げられる～・・・」
そうつぶやいて最後の1人も倒れた。

「まだやまだやー！！　前線、行けーっ！！　後援部隊は後方支援に徹するんや！！」
指揮官の指示で数十人の歩兵がヒー郎目掛けて突進をしかける。

「ちぃっ！　今日は数がやたら多いな。　いいか、お前ら、ちゃんと援護しろよ！！」
指示に鉄砲部隊がはっきりと了解したのを確認すると、ヒー郎は突進してくる歩兵部隊に目を向けた。
ヒー郎は剣を前に突き出す。　ランダムに突進してくる数多の槍。
先頭をきる歩兵がヒー郎の前で足を止めると、後からやって来た数人は取り囲むように輪を形成した。
一斉に槍を向ける歩兵隊。　周囲を見渡すヒー郎。
「攻撃！！」
1人の歩兵の一言で、輪を形成した歩兵部隊が一斉に槍を突き出した。
・・・が、その瞬間、ヒー郎の姿が一瞬にして消える。
「何！？」
動揺する歩兵隊。　すると、ふと上を見た歩兵が上空を指差して叫んだ。
「あっ・・・あそこ！！」
それと同時に歩兵隊の視線は空に集まる。
太陽の光に重なる人影。　その姿は・・・
「ヒー郎！！！」
その瞬間、中央で交差する複数の槍の上に着地。
その衝撃で手を傷めた歩兵隊は、思わず槍を落としてしまう。
「ぐぁぁあああ！！！」
手首を押さえながら苦しむ歩兵隊に、ヒー郎の鉄剣が襲い掛かる。
驚異的なスピードから繰り出された回転斬り・・・いや回転殴りで、ヒー郎を取り囲んでいた歩兵隊は簡単に一掃され、周囲に吹き飛ばされた。
「ふぅ、てこずらせやがって・・・。」
散らばって気絶している歩兵を見ながら額の汗をぬぐうヒー郎。
そのヒー郎の前に、突然大きな足音の兵士が現れた。
「てこずらせたのは前座や。　今からここに血の雨を降らせたる。」

分厚い鉄の鎧、身の丈をゆうに超える巨大な斧、そして筋肉質の巨体をもつ男。　歩兵部隊の指揮官だ。
指揮官は大斧を勢いよく振り回すと、力強く構えてそれをブーメランのように投げ飛ばした。
「何ィ！！！」
３mはある巨大な斧が豪快な音をたてて接近してくる。
咄嗟（とっさ）の判断で姿勢を低くし、ギリギリでかわしたヒー郎。
「無駄に腕上げやがって・・・。」
そう言って立ち上がり、剣を構える。
「おっと、いいんか？　第二波くるでぇ。」
怪しい笑みをうかべて斧を受け取る体勢に入る指揮官。
すると、ヒー郎の背後から聞き覚えのある豪快な音が。
「嫌な予感バリバリだな。」
ヒー郎が後ろを振り向くと、案の定さっきの大斧がすぐ目の前にあった。
「ちっくしょう！！　無駄に腕上げてんじゃねぇよ！！！」
瞬時に盾を構え、斧を受け流すが、ぶつかったのは数十ｋｇはある鉄の塊。
ヒー郎は指揮官の方向に大きく吹き飛ばされ、盾も使い物にならないほど変形してしまった。
「痛たた・・・あ？」
倒れたヒー郎の目に映ったのは、不気味な笑みを浮かべる指揮官。
大斧を大きく持ち上げ、力を溜めている。
「ついにここまできたでぇ。　その首もらったぁあああああ！！！」
振り下ろされる大斧。　守るための武具である盾をもたやすく変形させた鋭い鉄の塊。
ヒー郎は、腰の鞘（さや）に手を当て叫んだ。
「くっそぉおおおお！！！」
広い草原に響き渡る２者の叫び。

青い空に放り出されたのは・・・・・・・斧、の先端。

「なっ・・・何やと！！！」

指揮官が目を丸くして見ていたのは、鉄の棒。　さっきまで斧だった自慢の武器である。

その切り口は、高熱で赤く光り、湯気と熱気を放っている。

「熱剣ーフェニックスブレード。」

不意に聞こえた男の声。

気が付くと、眼前でヒー郎が指揮官の首に向けて剣を突きつけていた。

しかも、ただの剣ではない。　刃が赤く光り輝いている。

首に伝わる熱気。　その熱は、鉄を一瞬で溶かし切ったほど。

「こいつが、俺が英雄である証だよ。」

さっきまでの威勢はどこへやら、指揮官は厳しい表情で震えている。

「いいさ、テメェの質問に答えてやる。　俺が”天下の英雄”と呼ばれるその所以(ゆえん)をな。」

そう言うと、さっきまで戦闘していた歩兵部隊と鉄砲部隊は、その動きをピタリと止めた。

「5年前だったか6年前だったか、ある国に悪逆の王がいた。名前はたしか・・・うん、まぁいいや。

とにかく、そいつは武力を持ってして周囲の国々を次々に蚕食(さんしょく)していった。

チョベリバなヤツだったっぽいぜ。　で、そいつの数万という兵士に対してたったの1人で立ち向かったのがこの俺だ。　んでもって、何だかんだで敵軍を殲滅してその王も討ち取った！！・・・らしい！！

・・・この剣はそのとき使ってたっぽいカラクリ剣だ。　闘志に反応して刃に高熱を帯びる仕組みになってる。

刃と熱のWの効果で斬れるこの剣で、数万の敵兵をバンバン倒して

いったんだろうな。」

ヒー郎が言い終えると、周囲の歩兵部隊と指揮官は、みんなして難しい顔をしていた。
まぁ、誰が聞いても首をかしげるだろうが。
「あのー、それ、お前の話かいな？」
首に剣を突きつけられたままの指揮官が沈黙を破って質問した。
「だから、俺が何で英雄になったかを話してるんだろうが！！」
「いや・・・それにしては、なんか”っぽい”とか”らしい”とか曖昧な表現多いなー、って。」
すると、指揮官及び、歩兵部隊共通の疑問に、鉄砲兵の１人が間に口を挟んできた。
「あのだな、ヒー郎どのは、過去の記憶を失っているのだ。　今は２４歳なのだが、記憶は１８歳からのものしかない。　英雄であるという話は、王様から聞かされたものなのだ。
正直、我らも知らなかったのだが、ヒー郎どのを養子に迎え入れた王様が言ったことなのだ、
腕も確かであるし、その情報に間違いはないだろう。」
「最初は俺も驚いたさ。　ある朝目覚めたら”どこだここ！？”ってなってな、いきなり英雄になったって
聞かされて、そして王子だと。　・・・王子って感じの暮らし未だにしてないけどな。」

話を聞いていた指揮官は、少しずつ後退しながら、
「むむむ・・・そんなヤツと１ヶ月も戦ってたんかいな・・・よしっ！！」
と何かを決心すると、物凄いスピードで回れ右をして、凄まじい速さで一目散に逃げていった。
「総員退却～！！！」

遠くからの大声指令に、歩兵部隊も慌てて逃げていった。

「ふぅ、やっと終わったか。　・・・てか何でみんな俺が英雄だってこと知らねぇんだよ。」
ヒー郎は2本の剣をそれぞれしまい、ヤウロッパの国に向かって歩き出す。
「まぁまぁ、とりあえず奴らも聖地を諦めたようですし、今夜はみんなでパーッと飲みにでも行きませんか？」
鉄砲部隊もヒー郎と一緒に国に向かって歩き出す。
苦しい戦争が終わり、疲労も溜まっていた。
そのこともあってか、皆は飲み会の話で盛り上がり始める。
ここ最近、聖地をめぐっての戦争ばかりで、ヒー郎にも嫌なことが沢山あった。
英雄としての実績を称えられ、隊長となり、部隊を5つも任せられたものの、判断ミスも多かったのだ。
そのたび上司に怒られ叱られ、精神的に癒しが欲しかった。
久しぶりの飲み会、ヒー郎は快く引き受けると、城に向かって歩を進め出す。
・・・が、少し歩くと、1人の兵士がヒー郎に向かって歩いてきた。
「あー、ちょっといいかな？」
「あ？」
呼び止められたヒー郎につられて、周りの鉄砲隊も歩みを止める。
「ヒー郎さん、何か用事ですか？」
「いや？　俺は何も聞かされてないけど。」
鉄砲兵に聞かれても、イマイチ頭のハテナがとれない。
すると、兵士は偉そうな口調で後ろに手を組みながら言った。
「用事ではない。　ちょっとお前に緊急の仕事が入ってだな。　まっ、そこまで固くなる必要はない。ちょこっとした出張みたいなもんだからなぁ、うんうん。　でもな、一応緊急だから、今すぐ国王

執務室に来て事情を聞いたほうがいいだろう。　話が盛り上がってるところすまないが、同行願いたい。」
いかにも上司っぽいその口調に押し切られ、ヒー郎は素直に了解した。　いや、仕事なため選択肢は1択なのだが。
「あー・・・、急に仕事入っちゃったわ、俺。」
気遣うように鉄砲隊に言った。
「まぁ、仕方ないですよ、仕事ですし。　あっでも、多分長い間居酒屋にいると思うんで、時間あったらいつでも来て下さい。」
「それにしても、出張ですか。　ヒー郎どのも大変ですなぁ。　まぁ、どのみち出発は明日以降になるんでしょうし、いつもの居酒屋でよければ私ともども、しっかり見送らせていただきますぞ。」
「あぁ、ごめんな。　必ず行くから。」
そう告げると、ヒー郎は先導する兵士についていき、城内の国王執務室に向かうのだった。

ここは、国王の仕事場、国王執務室。
壁も床も石積みの粗末な部屋。
しかし、本棚や机、椅子に絨毯（じゅうたん）など、備品だけは立派に揃えてある。
立派に揃えてあるのだが、なぜかやたらと散らかっている。
絨毯は思い切りずれ、本棚は倒れて本を散らかしている。　机は窓際で逆さまになっている上、
脚が1本とれていた。　椅子は机とは全然違う方向に転がっている。
損失した脚も然り。
そんな部屋の真ん中で、みかんダンボールに座った王様は、ヒー郎に一通りの事情を説明していた。
よく見ると、さっきの兵士が王様の後ろで腕を組んでいる。
「・・・・・で、その世界地図を作るために旅に出ろと？」
「うんうん、ヒー郎ちゃんなら絶対に成功するって信じてるわぁ。」
ヒー郎は、ビールビンがいっぱい入っていたであろう黄色いカゴを

逆さまにしたヤツに座り、王様の話を聞かされていた。
「お前ウソついてるだろ。　原因お前だろ？」
「何言っちゃってるのよヒー郎ちゃん。　ホントにお偉いさんから頼まれたのよ～。」
「本当にお前は何もしてないんだな？　ここでは何も起こらなかったんだな？」
「当然よ～、さっきからそう言ってるじゃなぁい。」
「そうか、何事もなければこんなに散らかっちゃいねぇと思うんだがな。」
辺りを見渡すヒー郎。　周囲は、台風でも来たのかというほど散らかっている。
オマケに天井には大きな穴があいているわ、そのすぐ下で怪しげな宝箱のフタが開いているわ、
明らかに”何事もなかった”では済まされない光景である。
「・・・王様、何で私が連れてきている間に片付けておかなかったんですか。」
後ろの兵士がボソボソと話しかける。
「仕方ないじゃないの、お化粧するのにいっぱいいっぱいで片付ける時間がなかったのよ。」
一連のコソコソ話を、ヒー郎はイラついたような半目で聞いている。
しかしある程度その話が続くと、王様はヒー郎の表情に気付いたのか、冷や汗たらしながら話を進めた。
「まぁとにかく、別になーんにも隠し事とかしてないから、安心して行ってらっしゃいねぇ。」
「隠し事してるだろ。」
「してないわよぉ～。　私ウソつかないもの。」
「本当か？」
「本当よ。　隣国のお偉いさんに頼まれてぇ・・・。」
「本当の事を言え。」
「変な宝箱開けて大変なことになってしまいましたゴメンナサイ。」

王様、白状。

数分後・・・

「なるほどな。」

腕組みをしながらうなずくヒー郎。

「王様が宝箱を開けたとたん、黒い玉が大量に噴出して、天井は吹き飛ばされるわ、

室内はメチャクチャにされるわでそれはそれは大変だったのだ。」

跪(ひざまず)いた兵士が泣きながら説明する。

「その黒い玉は、世界中に飛び散って、それぞれ飛来した所に住み着くそうよ。

それで、その・・・住み着いた地域に災いをもたらすって・・・。」

王様も兵士のとなりで跪いている。

「玉が住み着くのか？」

「いや、その、玉はあくまで封印されていたときの姿で、飛来したあとはその・・・バケモノになってるみたい。」

国王も兵士も頭が上がらない。

「・・・っていうかさ、何でお前らそんなに詳しいん？」

「えっとだな、黒い玉が噴出し終わった後の宝箱の底に、神様がいて・・・まぁ、教えてもらったと。」

「神様？」

ヒー郎は辺りを見渡す。

「どこにもいねぇじゃねーか、そんなもん。」

すると、王様と兵士は床の方に手を向けて、当たり前のように言った。

「さっきからいるじゃない、そこに。」

「最初からここにいるんだが・・・。　お前には見えないのか？」

ヒー郎は2人の手の方向を目でたどり、ゆっくりと視線を床に送る。

「あぁ、どうも。　初めまして。」
ヒー郎は目をこすった。　そしてもう一度見た。
「あのー、ひょっとして、ホントに見えないんでしょうか・・・？
　そんなことはないと思うんですが・・・。」
間違いなくそこにいる。　全長７ｃｍほどの淡く光る・・・・・・
カマキリが。
「・・・ふぅ、疲れてんのかな、俺。」
目元を押さえて首を振るヒー郎。
「疲れているのではない、このお方はまさしく神様だ。　聖書にも
きちんと載っている。」
「いや、疲れてる。　俺は疲れてる。　そんな宗教的なこと俺は信
じないぞ。」
相変わらずヒー郎が頭を抱えていると、神様が話をもちかけてきた。
「えっとですね、僕は知識の神ガリガーリといいます。　王様が開
けた”パンドラボックス”の中で、
万が一のための希望役として待機していました。　さっき王様が説
明して下さったように、現在、
世界中にはあらゆる災いを象徴する、神の一種”災獣（さいじゅう）”が解放され
ています。
災獣がはびこっていると、人々は災いに苦しみ、そのうち滅びてし
まいます。」
人類が滅びる、という話を落ち着いた笑顔でする神様ガリガーリ。
そんなガリガーリをヒー郎は疲れたような目で見つめていると、ふ
とこんなことを言いだした。
「あのさ、カマ様の間違いじゃねーの？　こんな神見たことも聞い
たこともねぇぞ。」

「なっ、何を失礼な事言いだすのだ無礼者！！　この方は聖書にも載っておられる正真正銘の神様なのだ！！
”信ずる者は救われる”と習わなかったか！？　・・・どうもすみませんウチのアホが無礼なこを・・・。」
焦った兵士。　もうヒー郎よりも神様の方に気を遣っているようだ。
「アホって何だよアホって・・・。」
「まぁ、とにかく話進めましょ。　神様、この者のために続きをお聞かせ下さい。」
王様が一礼して頼むと、ガリガーリは愛想笑いをしながら説明を続けた。
「まぁ、そんな気を遣わなくても結構ですよ。　えー、では説明の続きをさせて頂きますね、ハイ。
で、その災獣なんですが、攻撃による肉体的ダメージで傷付け、僕が部下の神に命令することで
またこのパンドラボックスに封印し直すことができます。　そうすれば、その災いは治まり、
災いによって変化したものも、ある程度は元通りになります。　長い旅にはなると思いますが、
僕も同行するので、どうか奮ってご参加ください。」
「・・・だ、そうだ。　ヒー郎、奮って行ってくるのだ。」
人事のように偉そうな発言をする兵士。
それに対してヒー郎はハッキリと答えた。

「やだ。」

そっぽをむいてしまったヒー郎。
そんなヒー郎に王様が説得を試みる。
「ねぇねヒー郎ちゃん、災獣をあのままにしておいたらみんな困るのよ。」
「お前が行けばいいじゃねぇか、事の発端はお前なんだし。」

後ろの王様を睨(にら)むヒー郎。
「私は戦う能力なんて持ってないわぁ。」
「じゃあ軍隊出せばいいだけの話だろ？」
「そんな、詳しい場所も分からないのに色んな国に立ち入るのはすごく手間がかかるわ。
人数もかなり必要になるし、それだけの費用もないし。」
「だからって何で俺が行かなきゃなんねぇんだよ！！」
「ヒー郎ちゃんは、”天下の英雄”でしょ？　一騎当千の実力を持つ兵士なら、派遣のコストを最小限に抑えることができるのよ。
それに、もし大人数で行って、私のせいで世界が脅威にさらされてまーす、なんて知れたら世界中の人達から敵視されちゃうじゃ・・・」
「えぇい、うるさい！！　とにかく俺は絶対に行かねぇぞ。　楽しい会話の途中でいきなり呼び出されて
得体の知れない虫なんか見せられて変な獣の話なんか聞かされて、
挙句の果てには尻拭(しりぬぐ)いだ？
そんなの俺はゴメンだな！！　こっちは飲み会で人待たせてんだよ、帰る！！」
そう怒鳴ると、執務室の戸を蹴り倒して出ていってしまった。
静まり返る部屋。　困った表情をする王様とガリガーリ。
気まずい雰囲気の中、兵士が　ふぅ　と息をもらす。
すると、兵士は王様とガリガーリの前に出て自信満々に言い放った。
「安心して下さい。　ヒー郎は必ずや、派遣してみせます。」
「「えっ？」」

～翌日～

早朝、ヤウロッパの正門の前。

空は若干、青みがかっているものの、まだ薄暗い。
朝を告げる小鳥の鳴き声が響き渡っているが、さすがに早すぎるため人気(ひとけ)はない。
・・・・・・1人分の人影を除いては。
「・・・・・・何で・・・何で俺、ここにいるんだ・・・？」
朝早いヤウロッパの正門前にいたのは、ヒー郎だった。
中世の農民が着ていそうな普段着に身を包み、
荷物がいっぱいつまった袋をサンタの如く担(かつ)いでいる。
「まぁまぁ、どのみち誰かがやらなけきゃならないんですから。」
ヒー郎は自分の肩を見た。　カマキリがいる。
「お前さぁ、神様なん？」
「そうですよ。」
ヒー郎は額を押さえて溜め息をつく。

・・・こうなったのは昨日の夜、飲み会でのこと。
ヒー郎が酒で泥酔している時間帯を狙ってあの側近兵士がやって来て、ウマい具合におだてたのだ。
泥酔している状態でおだてられたヒー郎は、その勢いで書類にサインして、その上印鑑まで押してしまったのである。

”私は、世界を救うために災獣討伐の旅に出ることを、ここに約束します。
なお、任務を達成するまでの間、このことは極秘扱いとし、
いかなる状況におかれても一切の情報を黙秘することを、ここに誓います。
万が一、これらの約束が守れなかった場合におきましては、
私をヤウロッパ国王の召使いとして一生コキ使うことを許可します。
”

「・・・・・・あのヤロー・・・・覚えてろよ・・・・。」
眠そうな顔つきで袋から鎧と剣を取り出す。
「さっさと終わらせてあのクソオヤジぶっ殺してやる。」
ヒー郎は剣を着て鎧を手に構えた。
「ヒー郎さん、逆です。」
「黙れ、これが新スタイルなんだよ。」
そう言いながらも鎧を着なおすと、しぶしぶ正門を押し開けるヒー郎。

ムニュ

変な感触。　門の先に何かある。

ムニュ

「おいなんか開かねぇぞ。」
すると、わずかに開いている門の隙間から、何か黒い尻尾のようなモノが出てきた。
「あ？」
次の瞬間、絶大な力で向こう側から門が押される！！
「ちょっ！！！　何だ何だ！！」
向こう側からみれば、引いて開けるべき門を押して開けようとしている。
その力は圧倒的で、耳を貫くような大音が周囲に響く。
軋(きし)む門。　木製の巨大な戸に分厚い鉄器をはめてできた門が、みるみるうちに崩壊していく。
ヒー郎は壊れ行く門を、突破されまいと必死に押さえつける。
「何だ！？　何が起こってんだよ！！」
「分かりません。　でも、なんか危険そうです！！」

混乱しらがらも必至に門を押さえていると、これまた急に力がおさまった。
うってかわって静かになる周囲。
「な・・・なんだったんだ、今のは。」
ヒー郎は息切れしながら門に背中をつけておっかかる。
すると、

キーアッ

門の奥、遠くの方から鋭い音が聞こえてきた。
いや、音というより・・・鳴き声。

またもや次の瞬間、ヒー郎のすぐ横から、ウォーターカッターを彷佛(ふっ)とさせる
高圧縮の水流が飛んできた!!
「うぉおおおお!!?」
すぐにその場を離れるヒー郎。
分厚い門を一瞬で貫通した水流は、そのまま楕円を描くように動きだす。
「いやホント何!!?　マジ何これ!!?」
移動した水流の跡は、きれいな切り口をもって切断されている。
「大変です!!　このままでは門がっ!!!」
素速い動きで門を切断する水流は、ガリガーリが警告する頃にはすでに止まっていた。
空中で停滞していた水が、霧のように降り広がる。
切り口にそってゆっくりと倒れる門。
その不可思議な光景を、ヒー郎はじっと見つめる。
重く響き渡る音と共に、撒かれた水が飛沫(しぶき)をあげた。
霧に霞んで見えるのは・・・数匹の大蛇?
「・・・ヒー郎さん気をつけて下さい。　災獣の可能性があります。

」
ヒー郎の肩から小声で警戒を促すガリガーリ。
「あれが、災獣・・・？」
ゆっくりと霧がはれていく。　それに伴い、大蛇の姿も露になっていった。

９匹ではない。
９本の首をもった黒い大蛇。
その大きさは、持ち上がっている首の部分だけでも、ゆうに５ｍはある。

完全に霧がはれ、大蛇もヒー郎を確認する。
「注意して下さい、あれは全ての災獣の中でもトップクラスの能力をもつ種類です。　一筋縄ではいきませんよ。」
真剣な表情のガリガーリ。　ヒー郎は慎重に剣を取り出す。
大蛇の方も、ヒー郎の敵意を察知すると、胴体で器用にトグロを巻いて攻撃体勢に入った。
「ヒー郎さん、」
「分かってる。」
二股の舌をチロチロさせて体勢を少しずつ低くしていく大蛇。　飛び掛る気満々。
ヒー郎も、鉄剣を右手に、盾を構え始める。
緊張感の漂う中、身をかがめる大蛇の動きが止まった。

「・・・来る！！！」

ヒー郎の目が大蛇のわずかな予備動作を捉えた。
一瞬にして飛び掛る大蛇。
耳をつんざく鋭い鳴き声。
的確に獲物を狙う毒牙。

全長１０ｍはあろうかというその巨体が、ヒー郎に襲い掛かる！！

第2話　災いの始まり

これは、まだ神々が捨てるほどいた時代の物語。
前回、敵国との激戦においてヤウロッパの国が追い詰められた際、
切羽詰(せっぱつま)った王様は、ワラにもすがる思いで怪しげな箱を開けてしまった。
その箱は、古今東西ありとあらゆる災いを封じているとされるパンドラボックス。
開けると封じてある災いが一気に飛び出してくるという迷惑なシステムが搭載されており、
封印してあった災いは全て世界中に解放されてしまった。
災いの象徴とされる”災獣”を封印すれば、その災いはおさまる。
最後に残された希望、知識の神ガリガーリの言葉を信じ、
王様はなんだかんだで天下の英雄、ヒー郎を派遣。
派遣されたヒー郎は、しぶしぶ正門を開いたのだが、
その先にいたのはトップクラスの戦闘能力を持つ災獣だった。
いきなりの強敵。　９本もの首をもつ黒い大蛇。
１０ｍはあろうかというその巨体が、ヒー郎に襲い掛かる！！

ヒー郎は持っていた盾を構えた。
・・・が、よく見るとその盾は使い物にならないほど変形している。
「な・・・なんじゃこりゃぁあああ！！！」
目を丸くするヒー郎。　蘇(よみがえ)る記憶。
昨日の戦争で指揮を務めていた、あの指揮官との交戦中、
投げつけられた斧をまともに防いだせいで、有り得ないほど湾曲していたのだ。
「どいつもこいつも、ロクな事しねぇえええええ！！！」
ふと上を見ると、大蛇の巨大な４本の牙。

ヒー郎は、咄嗟の判断で真横に回転回避する。
黒い巨体が、ついさっきまで自分のいた位置に激突し、泥水が大きな飛沫をあげた。
回避と飛沫で、泥まみれになるヒー郎。
打ち所が悪かったのか、左腕を押さえている。
「ヒー郎さん、逃げましょう！！　今の貴方に敵う相手じゃありません！！」
飛び寄ってきたガリガーリが焦った表情で告げる。
「ふざけんな・・・俺は天下の英雄だ、俺より強いヤツなんているワケねぇだろ・・・。」
苦しげなヒー郎。　左腕を押さえたまま立ち上がる。
「違うんです！！　あの災獣は、そのへんの災獣とはワケが違うんです！！」
初撃から大怪我を負ったヒー郎を見ての、ガリガーリの判断だった。
しかしヒー郎は無言で剣を抜く。
「ヒー郎さん！！」
「黙れ！！！　・・・・・・見つけるんだよ、”答え”を。」
「へ？」
ガリガーリの厳しい表情が解かれる。
「・・・周りは俺を”英雄”って呼んでやがる。　でもなぁ、それはあのオカマから聞いただけだ。　実際は誰も知らない。　昨日もそうだった、あのデブも俺が英雄だってことを知らなかった。　・・・・・・そういうとき、考えるんだよ。　”本当に俺は英雄なのか？　本当に俺は世界を救ったのか？”ってな。」
ヒー郎の真剣な眼差しは、起き上がる大蛇を一点に見つめている。
「ヒー郎さん・・・。」
「俺は過去の記憶がない。　それを知る方法は１つしかねぇんだよ。」
ヒー郎の持つ剣の刃が、熱を帯びて赤く光り輝きだす。
「・・・・・・もう一度、世界を救ってみせる・・・！！」

大蛇が、甲高(かんだか)い雄叫びをあげて胴体を丸めだした。
ヒー郎は赤く輝く刃を突きつけながら、ぬかるんだ地面を力いっぱい蹴って走り出す。
「英雄の俺なら！！　敵わない相手なんざいねぇハズだ！！！」
大蛇は丸めた体を一気にひねり、大きな尻尾で思い切りなぎ払った。
高くジャンプして避けるヒー郎。そのまま剣を突きつけながら突進する。
大蛇まであと少し。　するとそのとき、わきから黒いモノがせまってきた。
大蛇の尻尾。　なぎ払った勢いで再び返してきたのだ。
急な攻撃に反応できず、まともにくらって吹き飛ばされるヒー郎。
　塀(へい)に激しく叩きつけられ、右肩を強打してしまった。
「ヒー郎さんっ！！」
叫ぶガリガーリ。　ヒー郎は苦しそうに起き上がる。
「大丈夫だ・・・まだ、いける・・・。」
剣を杖にしてゆっくりと起き上がったヒー郎だが、休む間もなく大蛇は鋭い鳴き声を高らかに発した。

キイィィィィィィィアッ！！！

聞き覚えのある鳴き声。すると、大蛇の口の中でどこからか現れた水が渦を巻き始める。
ガリガーリはそれを見るやいなや、大声でヒー郎に警告した。
「　！！！！　ヒー郎さん避けて！！！！」
「何！？」
ガリガーリがヒー郎の頭にダイブし、ヒー郎はその勢いで倒れる。
すると次の瞬間、高圧縮で発射された大量の水がものすごいい勢いで頭上を通過した！！
レーザービームのような激流が塀(へい)に直撃し、ヒビ1つない綺麗な穴があく。

「今の攻撃・・・まさか」
ヒー郎は門が破壊されるときのことを思い出した。
頑丈に作られた、弾丸ですら傷1つつかない門をたやすく切り裂いたあの水流。
今思えば・・・・・しかし、いくら大蛇とはいえ蛇の口からあんな激流が発射されることは有り得ない。
考えていると、頭から降りてきたガリガーリが大蛇の動きに注意しながら、話の続きをもちかけてきた。
「ヒー郎さんの熱意は分かりました。　でも、命の危険を感じたら速やかに逃げて下さい。　・・・・・・同意するなら、僕も協力しましょう。」
ヒー郎は、大蛇を睨(にら)みながら黙ってうなずいた。
「あの災獣は”ヒードラ”。　黒死病(こくしびょう)とも呼ばれる感染症、ペストを司(つかさど)る災いの化身です。　発達した筋力と、非常に硬度の高い鱗(うろこ)をもち、物理的な戦闘能力に優れます。　あと、ヒー郎さんもお気付きのようですが、ヒードラは水を高圧縮で発射する魔法を使います。」
「魔法？」
話の途中でヒー郎が質問する。
「はい、ヤウロッパ周辺ではまだあまり広まってないようですが、この世界には魔法というモノが存在します。　もうちょっと南下していくと使う人を見かけるでしょう。　物質がもつ魔力エネルギーを他のエネルギーに変換する際、特定リズムの音を発生させることによって特殊な現象を起こすんです。・・・ヴァーリレン現象っていうんですが。　例えば、魔力エネルギーが存在する状態で、”モエイル”という特定リズムの音を付近で発すると、魔力エネルギーが熱エネルギーに勝手に変換され、さらにヴァーリレン現象によって好きな所にその熱エネルギーを送ることができます。　特定リズムの音のことを一般には”呪文”と言いますね。　そのへんの生き物も魔法を使える種類がいるそうです。　さて、話を戻しましょう。

今の場合、ヒードラの発した”キーアッ”が呪文となって激流の魔法が発動したんです。　音域の関係でヒトには扱えませんが、発動するタイミングが分かるので、この呪文が聞こえたら事前に・・・・・・ってあれ？　ヒー郎さん？」

※【エネルギー】（えねるぎー）・・・物体が、物理的な働きをすることのできる能力。　光エネルギーや運動エネルギーの他、熱・位置・電気・化学・磁気など様々なエネルギーがある。　この世界では、魔力エネルギーも存在。

ヒー郎は全身の力が抜けてうつむいている。
「ちょっ、ヒー郎さん！！！　大丈夫ですか！！？」
ガリガーリがゆすると、ヒー郎は目を覚ました。　どうやら寝ていたようだ。
若干怒ったような目でガリガーリが言う。
「あの、話聞いてましたか？」
「・・・お前、話長ぇんだよ・・・痛たた・・・。」
「いやいや、寝てるヒマじゃないですよ！！　ヒードラがすぐそこに・・・あら？」
ガリガーリがヒードラに目を向けると、ヒードラもスヤスヤと寝ていた。　似たもん同士。
力の抜けた溜め息をつくガリガーリ。　それと同時にヒードラの首の１つが目を覚まし、他の首を起こして再び戦闘体勢に入る。
「まぁ、大まかなことは理解できた。　あとは俺がやる。」
「注意して下さい、ヒードラは常に毒気を吐いてます。　あまり同じ場所で戦い続けていると、毒気の濃度が高くなってきて死んでしまいますよ。」
最後のガリガーリの忠告（ちゅうこく）を聞くと、ヒー郎は大きく旋回（せんかい）しながらヒードラに急接近していった。

※【旋回】（せんかい）・・・円を描くように回ること。

ヒードラも、簡単には攻撃されまいと、水高圧縮型魔法で水流を発射し、接近してくるヒー郎を迎撃する。
しかし、旋回しながら突撃してくるため、なかなか命中しない。
焦ったヒードラは、全ての首で鋭い呪文を発し、９本の首から水流を四方八方に発射しだした。
噴きまわされる激しい水流。　周囲の壁やら門やらが見る見るうちに切断されていく。
姿勢を低くしたりジャンプしたりし、うまく避けて接近するヒー郎。
その手に握り締める剣の刃は、紅蓮に赤く染まっている。
ヒードラとの距離わずか５ｍ。　ヒー郎は剣を構えて一気に突進していった！！
至近距離まで接近され、水流の当たらない相手に驚愕の眼を見せるヒードラ。
その後、肉を引き裂くような音が周囲に響き渡り、ヒー郎はヒードラを貫通して背後で停止する。

動きを止めるヒードラ。　その体は小刻みに震えている。
「・・・・・・討った。」
ヒー郎はそのままのポーズで、そう呟いた。
直後、ヒードラの首の１本が泥飛沫をあげて落下する。
耳を貫くような甲高い悲鳴をあげて、のたうちまわるヒードラ。
それを見るとヒー郎は、剣を逆手に構えて大きく振りかぶった。
「決まった。　・・・俺は”天下の英雄”ヒー郎様だぁぁあああ！！！！」
凄まじい熱気を帯びる刃。　振り下ろされる先にあるのは、ヒードラの胴体。
ヒー郎の渾身の一撃が、ヒードラの急所を見事に突き刺した！！！

・・・・・・ということを想像していたヒー郎は、現在吹き飛ばされている。
勝ちを確信したようなセリフを言った後、わきからヒードラの首が頭突きしてきたのだ。
地面に叩きつけられるヒー郎。
「何だよアイツ、首を斬りおとしたってのにまだ生きてやがる！！」
ヒードラの首は確かに根元から切断され1本減っている。
しかし、まだ8本残っている。　首を1本失った程度、ヒードラにとっては大した痛手ではなかったのだ。
あれだけ苦戦してやっと与えた一撃。
首を根元から斬りおとしてみせたというのに、それでも平気で生きているヒードラを目の当たりにし、ヒー郎は改めて敵にまわす神々の強大さを知った。
だが、絶望はそれだけでは終わらない。
ヒー郎がわずかな希望を頼りに立ち上がると、ヒードラの切断された首の断面が不気味に蠢(うごめ)きだし、次の瞬間、肉を突き破る音と共に断面から新たな2本の首が生えてきたのだ！！
それを見て動きを止めるヒー郎。
そのヒー郎以上に戸惑うヒードラ。　出てきた首とさっきの断面を、目を丸くしながら交互に見ている。
「ふざけんなよ・・・何だよこれ・・・！」
ヒー郎は一気に戦意喪失した。
無理もない、致命的な傷を負わせたはずの狙い澄(す)ました一撃が、致命傷どころか相手をさらに強化してしまったのだから。

１０本に増えた大蛇の首。
全てを貫く水流。
何人(なんぴと)をも寄せつけぬ鉄壁の鱗(うろこ)。
あらゆるものを粉砕する怪力。
・・・そして、弱った獲物を確実に蝕(むしば)む毒気。

「ぐふっ！！」
「ヒー郎さん！！！」
咳(せ)きを押さえたヒー郎の手の平(ひら)に、猛毒に汚染された血がこびりつく。
完璧、最凶、絶対強者。
絶望以外の何物でもない敵が、目の前に立ちはだかっている。

（か・・・勝てない・・・？）

膝をつくヒー郎。
「俺は・・・英雄じゃなかったのか・・・？」
目の前には、新たに出てきた首を見て、おっかなびっくりするヒードラ。
ヒー郎の存在など、まるで眼中に無い。
少しすると、自分で穴を掘って逃げて行ってしまった。

静まり返る、湿った草原。
残されたのは、1人の男と1匹の虫と、大きな穴。
しばらくすると、ガリガーリが心配そうに近づいてきた。
「あの～・・・」
うつむくヒー郎に、ガリガーリが慰(なぐさ)めの言葉をかける。
「あのですね、ヒードラは全災獣の中でも、ぶっちぎりトップの強さをもつ災獣なので・・・・・・そもそも1人で倒せる相手ではないですし・・・。」
ヒー郎は、相変わらず膝をついてうつむいている。
「そ、それに！！　えっと、その、そう！！　あれですよあれ、えーっと、そう！！　1人でやったにしては、相当な戦果ですよ！！
普通だったら近づくことすらままなりませんから。　ていうか、

1人で相手して生き残っただけでも名誉なんですよ！！」
一通り慰め終わったあと、中傷していたことに気付いて口を止める。
なんと言葉をかけていいか分からない。　そんな状況が続く。
そんな中、ふとヒー郎のわきに目をやると、ヒー郎自慢の剣、熱剣
ーフェニックスブレードが熱気を帯びて光り輝いていた。
「え。」
立ち上がるヒー郎。　その目はまっすぐに前を見つめていた。
「・・・ったく、下手な慰めだな。　安心しな、俺はこんなんじゃ
挫折(ざせつ)しねぇよ、ガキじゃあるまいし。　その災獣ってのは他にもい
るんだろ？　だったら先にそっちから始末してやるさ。　面倒なの
は後回しにかぎる、うん。」
前向きなヒー郎に、ガリガーリは安心した笑顔で言った。
「強いんですね、ヒー郎さん。」
「おう、なんたって英雄だからな、仮にも。」
「あっ、でも傷とか毒とかは大丈夫なんですか？　あれだけの攻撃
くらって大丈夫ってワケにもいかないと思うんですが。」
「思い出させるなよ・・・急に痛み出してきたじゃねぇか・・・。」
ヒー郎は腕を押さえて咳払(せきばら)いし出す。
「た、大変じゃないですか！！　毒は効力は強いものの長続きしな
いのでそのうち治りますが、腕は骨折とかしてたら大変ですよ！！
　早急に手当てしましょう！！」
急に慌てだすガリガーリ。　呆(あき)れた表情で歩を進めるヒー郎。

ヒードラの撃退を通して互いを知り合った2人は、災獣討伐含む、
それぞれの理由をもってヤウロッパを旅立ったのだった。

第2話　災いの始まり（後書き）

ちょっと時間がとれなくてのんびり更新になってしまってますが、日々ちゃんと書いてますので（試行錯誤含み）、そこはちょっとご勘弁お願いします＾＾；

１週間に１回くらいのペースで更新できたらいいなぁ、と個人的には思っております。

そのことも含め、これからよろしくお願いします。

第3話　絆と死の山　前編

これは、まだ神々が　溢れんばかり　にいた時代の物語である。
前回、初めて災獣と戦闘をしたヒー郎だったが、「たかが動物」と甘く見ていたため
決定打に欠けたまま、災獣に逃げられてしまった。
なので、気を取り直して　違う災獣を討伐するために、とりあえず風の向くまま
気の向くまま　歩いていくのだった。

「ふぅ、結構歩いたな・・・。」
ヒー郎は　その辺の岩に腰掛けて休んでいた。
「よく　そんな所で休んでられますね。」
ガリガーリは、あきれた顔　かつ感心した顔　かつ心配そうな顔をして言った。
それもそのはず、ヒー郎が座っている岩は絶壁の中腹にあるのだから。
ガリガーリはというと、絶壁の上からヒー郎を、あきれた顔　かつ感心した顔　かつ心配そうな顔で見下ろしている。
ふと、ヒー郎が大声を出した。
「おぉっ！！！　あんな所に村があっぞ！！！　なんか美味いモンせしめるかも！！」
絶壁からは確かに家屋や放牧してある動物が見える。
「あんまり大声出すと危ないですよ～。　落っこちちゃいますよ～！」
「うおぉ！！！」
言ったそばから再び大声をあげるヒー郎。
「な・・・何ですか！？　まっまさか　落ち・・・」

「デッケェ　ナス発見！！！」
「・・・・・・・・・はぁ・・・。」
この時ガリガーリは全身の力が一気に抜けたという。
ともかく、ヒー郎は座っていた岩の下から　そのナスを抜くと、改めて大きさを確認した。
全長は１ｍくらいあり、太さは一番太いところで９０ｃｍもある。
誰しもが「デッケェ！！！」と叫ぶことだろう。
「ほれ見てみ、見てみ！！　バカみたいにデケェよ！！！　ほれ。」
ヒー郎は上にいるガリガーリに見せようとするが、ガリガーリは呆(あき)れ果てて見ようとしない。
「おいっ！　見ろよホレ！！　スゲーデケェよ！！！　見ろよ！
見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ見ろ・・・！！！！」
子供みたいに　うるさくなってきた。
それでもガリガーリは見ようとしない。
「見ろっつってんだろーが！！！　クソ虫野郎！！！！！」

ヒュウウウウウウウウウウウウウウウウ・・・ン

「あ」
ヒー郎は巨大なナスを投げ捨ててしまった。

・・・その頃　ヒー郎が発見した村ではこんな事が起こっていた。
「さぁさキレ太(た)、お誕生日おめでとう。」
「わぁ！　ありがとう　お父さん！！」
どうやら父親とその子供の会話のようだ。
小太りの父親が5、６才くらいの子供に誕生日プレゼントを見せている。
「この中にキレ太の大好きなモノが入ってるぞぉ。」
「え～何々？　早く見せて！！！」
「まぁ、そう焦(あせ)るな。今見せてやるぞ。」

子供はドキドキワクワクしていた。
「ジャーーーーーン！！！」

ドゴーーーーーーーーン！！！

「ナスだーーーーーーーっ！！！！！」↑子供（キレ太）

それを見ていたヒー郎は、
「・・・・・・・あの村は避けて行こう。」
固まりながら　そう言った。
しかしガリガーリが言い返す。
「いや、でも　もしかしたらあの村に災獣がいるかもしれないです
よ。」
「・・・そんなコトは無いだろう。」
ガリガーリにやっと聞こえるくらいの声でヒー郎が言う。
「行ってみましょうよ！！　ねっ！」
「・・・俺はいいよ。１人で行っ・・・・・・うわあぁぁぁぁあぁ
ああぁぁぁあぁあああぁぁぁあぁぁぁぁぁぁぁぁぁあああああああ
あぁぁああぁあ！！！！！！！！！！！！！！！！！」
落ちた。
「ほら、言わんこっちゃない。」
そう言うと、ガリガーリも絶壁の下へ飛んでいった。
結局、ヒー郎がケガをしたため　その村に行くことに。
ヒー郎達が足を運んだ村は、遊牧民が作った一時的な村で、道や店
は無く、ただただテントのような家が無造作に並んでいた。
木は　ほとんど見られないが、地面には青々とした草が一面に茂っ

ている。
もちろん、村に病院や診療所があるわけもなく、ヒー郎は村人の集会所で手当てをすることになった。
集会所といっても、やはりテントのような建物で、周りの家より一回り大きい程度。
しかし、床や壁が木造である分、少しは高級感が漂っている。
「へえぇ・・・アンタ、旅人だっただかぁ。」
「へっ、タダの旅人じゃねぇぜ。かの有名な”天下の英雄・ヒー郎”様とは俺のことだ！！！」
集会所の中で、ヒー郎は村人達に自己紹介を自慢気にしていた。
「”天下の英雄”・・・聞いたことねぇな。　お前、知ってるだか？」
「いやぁ、俺も知らねぇだ。」
やはり時の流れは非情である。
そこにいた村人は８人いたが、全員知らないというのだから。
「・・・・・・あ・・・そう。　じゃ、もう俺行くわ。消毒終わったし。」
すっかり機嫌を損ねて集会所から出て行った。
「おい！！　ホントに大丈夫だかぁ？」
「もうちょっと　ゆっくりしてっても　いいだよぉ。」
村人が心配して止めようとするが、ヒー郎は黙って出ていった。
ヒー郎が集会所を出て、ある程度歩くと　１人の子供がこちらの存在に気付いて走ってきた。
「お兄ちゃん、お兄ちゃん、見て見て！！」
ヒー郎は面倒くさそうに背を向けた。
「お兄ちゃん、お兄ちゃん、”えーゆー”のお兄ちゃん！！！」
ヒー郎は蔓延の笑みで子供のほうを向いた。
「おぉ！！！、分かるか？　分かるよな？　そうだよ”英雄”のお兄ちゃんだよ俺は。」
「うん！！　さっき聞こえてきたよ。」

「え・・・あ、聞いたんだ。さっき。」
とっさにヒー郎は目をそらす。
「ねぇね、見て見て、ほら　でっかいナスだよ!!　さっき降ってきたんだ!!!」
その子の手には、さっきの巨大なナスが。
「・・・・・・ちょっ、ちょっとそのナス　貸してくれるかな?」
「うん!!　いいよ。」
子供からナスを受け取るなり、ヒー郎は後ろを向いて、
「証拠隠滅!!　証拠隠滅!!　証拠隠滅!!」

ドスッ　ドスッ　ドスッ

「あぁっ!!　僕のナス!!!」
剣でみじん切りにした。
「おいおい!　ちょっと何してんだぁ!!!」
父親が出てきた。
「何だ”証拠隠滅”って・・・・・・ま、まさか　このナス・・・・!」
「いやいや!!　俺じゃないよ!!　俺そんなことしないもん!!!」
ヒー郎、シラを切る。
「ウソつけ!!　”証拠隠滅”ってオラちゃんと聞いただ!!!」
父親は怒り出した。
「・・・チッ」
「アンタの　このナスのおかげで、キレ太の誕生日が台無しになったんだ!!　ちゃんと償(つぐな)ってもらうだ!!!」
そんなこんなで、ヒー郎は家畜の世話をすることになった。

この村で放牧されている動物は「ステイゴー」と呼ばれる草食竜で、食用とされる他、卵も美味だという。

見た目としては、形はステゴサウルス、体色は全体的に灰色、背中の板は黒色をしている。
「いやぁ、人手が足りなかったもんだから、若いモンがいると助かるだなぁ。」
「んだんだ。」
この日、ヒー郎と村人合わせて計１１人が行(おこな)っていた作業は、ステイゴーの体洗いだった。
村人は慣れた手つきで、ブラシを扱っている。
一方、ヒー郎はというと　すでにステイゴーに１８９２回　蹴り飛ばされている。
「痛った！！　また蹴られた！　なんだコイツら！！　このっ　このっ　このぉぉぉぉぉぉ・・・！」
「おいおい、ちゃんと働け。バカもんが！！」
父親が仕事の合間に叱(しか)る。
「んだと、こんにゃろ～、もう１回言って・・・」

ドカッ

「ぐはっ！！！」
これで１８９４回目である。
「え・・・英雄をナメんなよぉ・・・。」
ヒー郎は右足を抱えながら、震えた声で言った。
「そうだ、アンタさっきから英雄、英雄って言ってっけど、何した人なんだ？」
「んだなぁ。なんか、ワクチンでも作ったか？」
この質問に対してヒー郎は、待ってましたと言わんばかりに勢いよく答えた。
「へっ・・・よく聞いてくれた！！　ワクチンじゃねぇけどな。聞いて驚くなよ・・・。俺はなぁ、かの悪逆(あくぎゃく)の・・・」

バキッ

「ぐはっ！！！・・・悪・・・悪逆の王の数万という軍隊に対して、たった・・・」

ゲスッ

「ごふっ！！！・・・たった1人で立ち向かい・・・」

ドゴッ

「ぐふっ！！！・・・立ち向かい、王そのもの　も討ち取った、強靭（きょうじん）な肉体を持つ・・・」

ボコッ

「げはっ！！！・・・肉体を持つ・・・天下の・・・え、英雄なのさ・・・。」

ベキッ

「ぎゃあ！！！！！」

「・・・・・なんか、スゴイ勢いで説得力が無いだな。」

ヒー郎はステイゴーに蹴飛ばされすぎて倒れていた。

「でも、数万の軍隊倒したって・・・ホントだったら　もしや・・・」

「うん・・・そうだなぁ。もしかしたら、やってくれるかもしれないだ。」

村人が話し合いだし、そのまま日が暮れていった。

「・・・う、うぅん。」
ヒー郎が目を覚ました。
「・・・？」
ヒー郎はあたりを見渡す。
家屋の中だった。自分が寝ていたのはこの家のフトンだろう。応急で作ったのか、座布団3枚の上に布を敷いただけの簡単なフトンだった。
どうやら、ステイゴーに蹴られて倒れたまま、1日が経ってしまったようだ。
とりあえずヒー郎は起き上がり、戸を開けて家から出た。
すると・・・
「いやぁ！！　待ってただ！！！　英雄のお目覚めだぁ！！！」
「さぁさ、英雄のヒー郎様！！　朝ごはんですよ！！！」
「天下の英雄・ヒー郎様！！　貢物（みつぎもの）のナスでございますだ！！！」
村人が30人くらい押し寄せてきた。
いきなりすぎる急展開に、ヒー郎は目が点になる。
現状がよく理解できていないのだろう。
「な・・・何？　何コレ？」
「何言ってるんですか！！　英雄がおこしになられたのだから当然のことですわ。おほほほほ。」
「さぁさぁ、朝食が　できてますよ。冷めないうちに・・・。」
村の人々に集会所まで連れてこられ、大きなテーブルの前の椅子に座らせられた。
テーブルには、極上の料理が並んでいる。
「いや・・・ホント何なのコレ？」
若干パニック状態に陥（おちい）るヒー郎。
「何でもありませんわよ。当然のことですわ。さぁ、どうぞお召し上がりになられて下さい。」

このオバサンは、さっきの「おこしになられた」といい、「お召し上がりになられて下さい」といい、二重敬語をよく使ってくる。

※【二重敬語】（にじゅうけいご）・・・敬語が二重に重なっている、言葉として正しくない語。正直、失礼な言葉である。

とりあえず、ヒー郎は村人の言うとおり朝食を食べることにした。
「まぁ、見た目は悪くないし・・・」
恐る恐る、最初の一口を口に運ぶ。

ぱく

「・・・・・。」
さっきまで、かなりにぎやかだった集会所はこの瞬間だけ　ウソのように沈黙した。
「・・・・・。」
「・・・・・。」
「・・・・・。」
5秒くらい沈黙したところで、さっきのオバサンが心配そうに口を開く。
「・・・・・どうですか？」
それに対して、ヒー郎が　とまどった様子で答えた。
「うん・・・まぁ・・・フツーっていうか・・・。」
相変（あいか）わらず、村人達は沈黙している。
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

」

「・・・う、うまいよ！！！　すごくウマい！！！　サイコーじゃん！！！　オカワリある？」

ヒー郎が、焦(あせ)りながら　そう言ったとたん村人達は急に騒ぎだした。

「おぉぉ！！！　よかった！！！　英雄様の口に合ったそうだ！！！」

「うおぉ！！！　我らの英雄、ヒー郎様！！！」

「皆の者、ヒー郎様をたたえよ！！！」

「うおぉぉおおおおおぉおおおお！！！！！」

騒いでいる村人の中、ヒー郎は　こっそり集会所から抜け出した。

「ゼッタイ、何かあるだろ・・・アレ。何か言われないうちに、とっとと逃げるか。」

すると、ヒー郎はもう一度言った。

「いや・・・もしアレが災いの影響だったら、災獣出没の可能性がある・・・。村人達から詳しい話を聞いておかないと！！！」

その後、ヒー郎は何かを地面に吐きつけた。

ぺっ

「あだっ」

地面に吐きつけられたのは、ガリガーリだった。

「俺の口ン中で何言ってんだよ。」

ヒー郎が、あきれた顔で言う。

「へへっ・・・結構、似てたでしょう？」

どうやらガリガーリは朝食の中に混じっていたようだ・・・何故か。

「昨日から見ないと思ったら、何してたんだよ？」

ヒー郎は　しゃがみこんだ。
すると、ガリガーリは真剣な表情で話し始めた。
「実はですね、僕、貴方が傷口の消毒をしてもらっている間、ちょっと下見に行ってたんです。災獣が飛来した痕跡があるか　とか、災獣がこの場所にいた形跡があるか　とか。・・・で、調査の結果・・・。」
「結果・・・？」
ヒー郎は何かを察したように不安な表情をみせる。
「この辺には生息していない生物の足跡を・・・発見しました。」
予想通りの答えに、ヒー郎は舌打ちする。
すると突然、集会所の方から人が慌てて騒ぐ音が聞こえてきた。

「な・・・何だ何だ今度は何だ！？」
ヒー郎が立ち上がって振り向くと、そこには集会所から慌てて出てくる村人達の姿があった。
「げっ・・・！　アイツら、追っかけてきやがった！！！」
ヒー郎は逃げようとするが、ガリガーリがそれを止める。
「ちょっと待って下さい！　様子が変ですよ。」
「あ？」
思わず集会所を見直すヒー郎。
その目に映ったのは、確かに不自然な光景だった。
大半の村人は、こっちに向かってくる。しかし、一部の村人は集会所から出てくるなり　すぐUターンして反対方向に走っていく。
しかも、その村人は成人男性ばかりで、手には短刀や鎌、包丁などを持っている。
その光景を見ていると、ヒー郎の横を子供や女性の村人が横切っていった。
「・・・行ってみよう。」
ヒー郎は、ここ一番の真剣な眼差しで言う。
「はい！」

そう言ってガリガーリが右肩に乗ると、ヒー郎は剣を抜いて走っていった。

集会所の向こうまで走ったヒー郎達が目にしたものは、驚(おどろ)きの光景だった。

昨日まで、ほのぼのとしていたステイゴーの簡易牧場が、戦場と化していたのだ。

逃げ惑(まど)うステイゴー、戦う村人、そして転がる死体。

その中で、すばしっこく動く生物が　ところどころに見える。

どうやら、ラプトル型の小型肉食竜のようだ。

背中に黒いシマシマ模様がある緑色のラプトルが3匹で群れを形成し、ステイゴーや村人を襲っている。

「チィッ・・・！」

ヒー郎は何も考えず、ただ無心で群れの中の1頭に飛びかかった。

しかし、そのラプトルは3mほど後ろにジャンプして攻撃をかわす。

攻撃を外したヒー郎は、大の字で思い切り地面に叩きつけられた。

「ぶっ！」

その後、攻撃をかわしたラプトルは、いったん指を丸めると、鋭い音を立ててナイフの様な隠し爪を繰り出した！

「痛た・・・くそっ・・・！」

再び攻撃態勢に入ろうとするヒー郎。

が、見上げるとすでに　そこには、飛びかかってくるラプトルのナイフ爪が日の光を反射していた。

「なっ・・・！」

素早い動きに翻弄(ほんろう)され、対抗手段など無い。

驚き眼(まなこ)で痛恨の一撃を覚悟した、その時！

横から回転をかけて飛んできた包丁がラプトルに刺さり、見事　攻撃を妨害した。

ヒー郎が、包丁の飛んできた方向を見ると、そこにいたのはキレ太とかいう子供の父親だった。

父親は、やや放心状態なヒー郎に叫ぶ。
「何ボーッとしてんだ！！　食われるぞ！！！」
ヒー郎はハッと気付き、さっきのラプトルを睨みつけた。
すると、ラプトルは怯えたような鳴き声を発しながら逃走し、周りにいた2匹の仲間も、ステイゴーの子供の死体に噛み付くと、引きずりながら一目散に逃げていった。

それから20分ほど経ち、村人達が集会所に集まった。
集会所の壁には、逃げたステイゴーが　ぶつかったのだろう。大きな穴があいている。
そんな集会所の中で、ヒー郎は一通りの事情を聞いた。
「なるほど・・・。アイツらがねぇ。」
腕を組むヒー郎。
「昔は、こんなんじゃなかったんだ。ラプトルが襲ってくるのはほんの・・・3ヶ月に1回くらいで・・・。」
村人の説明に、ガリガーリが付け足す。
「体の模様や全長、ナイフ爪などから判断して、たぶん”ヴェトリクス・ラプトル”ですね。」
続けてガリガーリがヴェトリクス・ラプトルの詳しい生態について説明し出すが、誰一人として聞いていない。
「何回も何回も、移動を繰り返して避難を試みただ。　でも、あの山がある限り結果はいつも同じだぁよ。」
「あの山？」
ヒー郎が食い入るようにして聞いた。
「あぁ、この近くにあるでっけぇ山だ。　こっからでも充分見えるらろ？　あの山にはラプトルが巣くってて、一度入ったら二度と出れねぇって言われる、それはそれは、おっそろしい山だぁ。」
それに付け足すように、他の村人が説明する。
「あの山は、ほんとに　でっけぇてな、離れるためにゃ1、2ヶ月はかかる。　休む度に襲われてたら、命がいくつあっても足らんだ。

」
うなずきながら聞くヒー郎に、父親が最後、改めて言った。
「とにかく、ここ最近になってからなんだ。ヤツらが毎日のように襲ってくるようになったのは。」
「そうそう、『ここ最近』・・・って具体的には、いつから・・・？」
いつも消極的なヒー郎が、さっきから真剣な表情で食いついてくる。
「そうだなぁ・・・確か・・・。」
父親は、周りの村人と相談し始めた。
そして、出てきた答えにガリガーリが説明をやめて驚愕した。
「そ・・・その日日って・・・ヒー郎さん！！」
ヒー郎とガリガーリは、目を合わせてうなずく。
正直、ヒー郎は理解していないが、確かにパンドラボックスを開けた日だった。
「襲撃回数の増加に、日日の一致・・・こんな偶然、あるワケありません！！　災獣出没とみて間違いないでしょう。」
「えっ？　あぁ、そっちか。うん、そうだな。」
ようやくヒー郎は現状を理解したようだ。
その時、外から来た村人のオバサンがバタンと集会所の扉を開けると、慌てた様子で叫んだ。
「アンタ！　大変！！　キレ太君が何処にもいない！！！」
「はっ？」
父親は思わず立ち上がった。
「あの、戻ってきた時に全員いるか調べたんだけど・・・キレ太君だけ何処にも見あたらないんだよ！！」
オバサンは、あたふたしている。
「とりあえず、もっとよく探してみよう！」
ヒー郎が仕切った後、村全体を村人全員で探しまわった。
しかし、どれだけ探し回っても見つからない。

「ヒー郎、そっちいただか？」
「いや、風呂おけの中も　机の下も　囲炉裏(いろり)の中も　釜の中も　畳(たたみ)の下も　屋根の上も
地面の下も　口の中も　耳の穴の中も　国語の教科書の５７ページと５８ページの間も　調べたけど、いなかった。」
もう、かれこれ９時間は経っていた。
夕日に照らされ血色に染まる高山を見てヒー郎がつぶやく。
「まさか・・・。」
その高山は、岩ばかりが転がっている岩山で、さっき集会所で村人から聞いた山である。
ヒー郎の頭の中に、村人達の言葉が過(よぎ)る。

あの山には、ラプトルが巣くってて、一度入ったら二度と出れねぇ・・・

襲われてたら、命がいくつあっても足らんだ。

ヒー郎は１回深くうなずき決心すると、村人達に向かって叫んだ。
「俺、あの山見てくる！！　お前らはここで探してろ！！　・・・絶対ついてくるんじゃねぇぞ。」
「さすがに・・・あの山にはいないだろう。キレ太だってあの山が危険なのは知ってるハズだ・・・。」
「んだんだ。あそこは、やめたほうがいいだよ。」
キレ太が高山に上っていったというなら、それは最悪の事態を意味する。村人のみんなも、
それだけは信じたくないようだ。
・・・が、不安気な村人達の中から父親だけが出てきた。
「オレも行く。もしかしたら・・・・・本当に、もしかしたらの

話だが・・・放ってはおけねぇだ。」
「ダメ。テメェは待ってろ。」
「ふざけるな！　オレはキレ太の父ちゃんだ！！」
父親はヒー郎の胸ぐらを掴んで怒鳴る。
ヒー郎は、怯(ひる)みもせずに父親を振り払うと、父親の体全体をよく見て言った。
「お前さ、見たところ４０いってるだろ。」
確かに、父親は４０歳を過ぎていた。
「そんなオヤジがついて来てもさぁ、息切れして戦力になんねぇんだよ。」
「で・・・でも、オレぁ体力には・・・す、少し自信があるだ。」
言い方からして、体力があるとは思えない。
そんな父親の肩にヒー郎が手を置くと、自信たっぷりに言い放った。

「安心しな。俺は”天下の英雄”だ。」

その自信過剰(じしんかじょう)とも言えるセリフに、父親は吸い込まれるように納得してしまった。
「え・・・あぁ・・・うん。」
「大丈夫。俺を信じろって。」
そう言うと、ヒー郎は高山に向かって足を踏み出した。
「ちょっと待ってほしいだ！！」
父親はヒー郎を止めて、駆け寄った。
「これ・・・キレ太に会ったら渡してほしいだ。」
ヒー郎は父親から木箱を手渡される。
それを何の躊躇もなく受け取ると、
「あぁ、任しとけ。」
そう言って高山に向かって走っていった。
「なんか、妙に安心しちまうだな・・・。」
村人の１人が言った。

「うん・・・なんだろ。不思議な力が・・・ナンタラカンタラな。」
と、続けてオバサンが言う。
「まぁ、とにかく。　今はヒー郎に任せよう。」
父親は振り返ると再びキレ太を探し始めた。

少しして。
「ふぅ、ここが　れいの山か・・・。」
ヒー郎は、ふもとから高山を見上げている。
「キレ太さんが心配ですし、もしかしたら災獣もここにいるかもしれません。先を急ぎましょう！」
「あぁ！」
ヒー郎は意気込んでゴツゴツした高山を上り始めた。
高山には道と呼べるような道は無かったが、岩が無く土だけの所があったため、そこを上っていくことにした。
ところどころ、急な坂道や崖があったり、わずかながら植物が生えてたりしたが、一番　目に入ったのは生物の死体だ。ネズミやヤギ、トカゲなどが食い荒らされている。もちろん、中にはステイゴーの死体もあった。
「・・・にしても、見るモノ全部死体だな。　臭いったらありゃしねぇ。」
「そこまでいっぱい無いですけどね。でも、不自然ですね・・・生きてる生物はいないんでしょうか。」
見る限り、生きている生物は見当たらない。どこまでも、死体と死臭だけである。
まさに、死屍累々（ししるいるい）というに相応（ふさわ）しい光景。
そんな中でヒー郎達が死体を横目に坂を上っていると、

「ギャーオ、ギャーオ！」

聞き覚えのある鳴き声が。

「！」
「この鳴き声は・・・！」
全速力で坂を上り、鳴き声のするほうへ走っていくと・・・。
「やっぱり！！　アイツらだ！！！」
目の前にいたのは3頭のヴェトリクス・ラプトルだった。
しかし、それだけではない。
「ヒー郎さん！！　あれ！！」
ガリガーリが指さした先には、キレ太がいた。
ガタガタと震えながら、木の棒を構えている。
対するラプトルは、3頭のうち一番前の個体が頭部を下げて威嚇していた。
「うぅ・・・あうぅ・・・」
キレ太は涙目で、武器を構えながらも怯えている。
一方、ラプトルのほうは目の色を変えてヨダレを垂らしていた。
明らかに危険な状態。
そしてついに、3頭のラプトルが鋭い音を連鎖させてナイフ爪を出した！
さらに、先頭のラプトルは飛びかかるために身を屈める。
絶体絶命の状態で、キレ太が死を覚悟したその時！
横から回転をかけて飛んできた剣がラプトルに刺さり、見事1頭を倒した。
もちろん、剣をとばしたのはヒー郎である。
ヒー郎は、倒したラプトルから剣を抜くと、残りの2頭も簡単に斬り倒した。
斬られて吹っ飛んだラプトルは地面に倒れると、うめき声をあげて蠢き出す。
「ふぅ。」
ヒー郎は汗をぬぐうと、剣についた返り血を拭き取って鞘におさめた。
キレ太は、未だに目を瞑ってガタガタ震えている。

「おいっ！　もう大丈夫だぞ。」
ヒー郎が言うと、キリ太は　きょとん　として目を開いた。
「あ・・・あれ？」
キレ太は周りを見渡す。
周りには、３体の死体。
「もっ・・・もしかして僕・・・」
「違ぇよ、バーカ。」
「あれ？　お兄ちゃん。何でここに・・・？」
キレ太はヒー郎の存在に始めて気が付いた。
ヒー郎は、しゃがんでキレ太と目を合わせると、微笑しながら言った。
「お前を迎えに来たんだよっ。　てか何でこんなトコにいたんだ？」
すると、キレ太はうつむき、小さい声で言った。
「・・・・・・えちゃんを・・・に・・・たんだ。」
「はっ？」
「さなえちゃんをっ！！！　助けに来たんだ！！！」
今度はヒー郎の目を見て、はっきり言った。
「さ・・・さなえちゃん・・・？」
ヒー郎は聞き返す。
「僕が育ててた、まだ子供のステイゴーだよ。」
確かに、今日牧場が襲撃された時、ラプトルは撤退（てったい）ざまに１頭の子供のステイゴーを
持ち帰っている。・・・・・・しかし、死体の。
「あぁ、あの死た・・・」
「ヒー郎さんっ！！！」
ヒー郎のセリフをガリガーリが止める。
「何だよ！　いきなり！」
「空気を読んで下さい。・・・お願いですから。」
「・・・ったく。　まぁ、とにかくお前は早く村に帰れ。たしか、死体しか転がってないハズだから。」

ヒー郎は、村の方向を指さしてキレ太に言った。
「ううん。まだ、さなえちゃん見つけてないもん。」
「・・・・・・。」
面倒なことになってきた。
「あのさ、りかちゃんは俺が探しとくから。」
「さなえちゃんだよ。」
「全然違うじゃないですか！」
「とにかく・・・さなえちゃんは僕が見つけるよ。僕が連れて帰るんだ。」
ものすごく面倒なことになってきた。
近未来に何か嫌なモノを見たヒー郎は後ろを向いて、キレ太に聞こえないようにコソコソと話した。
「おい、どーすんだよ。ちなみちゃん死んでんだろ？」
「さなえちゃんですよ。字数しか合ってないじゃないですか。」
ヒー郎は後ろを振り返った。
キレ太は、さなえちゃんを探している。
「とりあえず、応急処置として災獣探しに同行させますか？・・・・・・これ以上探させないように。」
「それ、応急処置じゃなくて”その場しのぎ”だろ。」
「しないよりはマシですよ。」
「・・・・・・それしか無いかぁ。」
ヒー郎は額（ひたい）に手をあてながら振り返った。
「おいっ、坊主！　俺もここで仕事があるんだ。ついて来い。　なっ？」
「え？　お兄ちゃんも？」
キレ太は聞き返す。
「行くの？　行かないの？」
ヒー郎は、若干怒っているように言う。
「あ、うん。行くよ。」
そう言うと、キレ太はヒー郎の手をしっかりと握った。

「くっついてねぇで、隠れてろ！」
ヒー郎はキレ太を振り払って、さらに上へ上っていった。
しかし、上れど上れど、あるのは岩と石と死体ばかり。
さらに、死体の数が増えてきているような気がする。
「くっせぇな。何なんだよコレ。」
ヒー郎は鼻をつまみながら死体を蹴飛ばす。
「そんなことより、そろそろ頂上ですよ。何も見つからないまま頂上についたら、どうにもならないじゃないですか。」
ガリガーリの見る１００ｍくらい先には、頂上らしき旗(はた)が。
「そうだなぁ・・・じゃあ、関係無さそうな所も調べてみるか。一応。」
ヒー郎は辺りを見渡すと、岩と岩の隙間や土の中を調べ始めた。
そして、探すこと２０分。ヒー郎がある岩をどかすと、何か洞窟のような穴を発見した。
「こ・・・これは・・・！」
ガリガーリが身を乗り出す。
「洞窟・・・みてぇだな。入ってみるか。」
「そうですね。」
ヒー郎はフェニックスブレードを取り出すと、その熱で枯れ枝に火をつけて、洞窟に入っていった。
ある程度進んでいくと、そこにあったのは天井に穴が開いている広間。
ヒー郎は枯れ枝の火を消すと、さらに奥に進んでいく。

バリッ

「ん？　何だ？」
ヒー郎は動物の骨を踏んでいた。
「この中にまで死体があるんですか・・・。」
ガリガーリはもう死体を見るのは飽き飽きのようだ。

「おい、何かおかしくねぇか？」
「え？」
ヒー郎は、踏んだ骨を手に取るとそれを眺めながら言った。
「洞窟の外にあった死体は、食いかけだったよな。肉付きの。」
「そうですねぇ。」
「でもよ、洞窟に入ったとたん・・・・・・」
ヒー郎は広間を見渡す。
「散らばってるのは、骨、になったよな。」
「あっ！　確かに。」
ガリガーリは前足を合わせて言うと、そのことについて考え始めた。
「外が食べかけ　で洞窟内が骨。いっぱい食べられてるのは骨のほう。つまり、この事から考えられるのは・・・・・・」
ガリガーリの話が止まる。
その後、ヒー郎とガリガーリは顔を合わせて苦笑いした。
「はっ・・・ははは。」
「はは、ははははは。」
２人は勇気を出して後ろを振り向く。
すると、もうだいぶ聞き慣れた鋭い音が、かなりの回数聞こえてきた。
その音は互いに重なり合い、広間に響いていく。

振り向いた２人が目にしたのは、大量のヴェトリクス・ラプトルだった。
見る限り２０頭はいる。いや、広間の壁にある段差や、天井の穴の上にいるモノも含めると１００頭以上いるのは確実。
そう、ここはヴェトリクス・ラプトルの巣だったのだ。
目の色を変えヨダレを垂らし、殺気立つラプトルの群れが、じりじりと近寄ってくる。
周囲に気を配りながら、静かに剣を抜くヒー郎。
赤く熱を帯びる光が薄暗い洞窟を照らす。

「なるほど、火で追い払うんですね。」
「あぁ、とりあえずはこれでどうにかなるだろ・・・。」
しかし、様子がおかしい。　本来火を嫌うラプトルが、それにも臆せず近寄ってくる。
「な、何だこいつら！！　ほら、火だぞ火、あっついんだぞ！！」
ヒー郎が熱剣を振り回して叫ぶと、ラプトルの群れは一斉に奇声をあげて飛び掛ってきた！！！

第3話　絆と死の山　後編（前書き）

色々諸事情あってかなり遅れてしまいました（汗）　すいません。
他の方の小説を見てみると、小刻み更新が多いようなので、自分も
次回からそうしてみようかと考えています。
では、本編。ナカナカの力作です。

第3話　絆と死の山　後編

これは、まだ神々がウジャウジャいた頃の物語。
前回、遊牧民の集う村にお世話になったヒー郎は、その村が小型肉食竜”ヴェトリクス・ラプトル”の被害に悩まされていることを知る。
災獣討伐のついでに掃討しようと考えていたところ、村の男の子キレ太が行方不明になったのだから　さあ大変。
災獣、ラプトル、キレ太の3つの事件の真相を探るため、ラプトルの巣くう危険な山に出かけたヒー郎達。
異様に死体の転がる山を進み、ラプトルに襲われていたキレ太を救出。
キレ太に逃げるように言うものの、”さなえちゃん”を助けるまで戻らないと言い出す。
すでに死んでいるさなえちゃんの救出をさせないため、キレ太を隠れながら同行させて災獣退治に。
しかし災獣を探している最中にヒー郎は、誤ってラプトルの巣に入ってしまった。
火を見ても一切怯む素振りを見せないラプトルの大群。
目の色を変え、奇声をあげながら一斉にヒー郎に向かって飛び掛った！！

「くそっ、猪口才（ちょこざい）な奴ら・・・っ！！」
ヒー郎は大きく後ろにジャンプして飛び掛りをかわすと、持っていた熱剣でラプトル達を片っ端から殴りつけた。
高熱に赤く染まる刃に吹き飛ばされたラプトルの傷は赤く爛（ただ）れ、地に蠢（うごめ）く。

※【猪口才】（ちょこざい）・・・クソ小生意気なこと。　こざかしい。

狂ったようにどんどん飛び掛ってくるラプトルの群れ。
いくらヒー郎といえど、１００もの数をたった1人で相手するのは流石（さすが）に困難を極めた。
「ヒー郎さん、やっぱりどう考えてもおかしいです。　ヴェトリクス・ラプトルがここまで攻撃的なハズはありませんよ！！」
「い・・・今話しかけんな！！」
戦闘しながら状況の確認をしているガリガーリは明らかな異常に不信感を抱いていた。
その間、ヒー郎は剣を振り回してラプトル達を殴りつけていくが、次々に飛び掛ってくるそのスピードに追いついていない。
「そう、そうです、数も足りませんね。　普通だったら１０００頭くらいの大規模な群れを形成するハズなのに、１００頭くらいしかいないのもおかしいです。」
悠長（ゆうちょう）に推理に専念しているガリガーリ。
その間、ヒー郎はラプトル達に集団リンチされていた。
「やはり、災獣の影響としか考えられませんね。　ヒー郎さん、ラプトル達を追い払ったら一刻も早く討伐に向かいましょう。」
腕・・・いや、前足を組んでうなずくガリガーリ。
その間、ヒー郎は良いご馳走になっていた。

数分後・・・

ヒー郎の目の前にいるラプトルはついに１０頭ほどになっていた。
周囲には、爛（ただ）れ傷のあるラプトルが大量に蠢（うごめ）いている。
どうやら気合で挽回（ばんかい）したようだ。
「くっそ・・・早く諦（あきら）めろっての。」
ヒー郎は数分しか戦っていないものの、１００頭を相手していたゆ

えに　さすがに疲れがみえる。
そんなヒー郎に立ちはだかる、わずかに残ったラプトルの目は正気に戻っていた。
「そろそろ逃げ出してもいいころなんですけど・・・。何でここまでこの巣に拘(こだわ)るんでしょうか？」
「俺が知るワケ無ぇだろ。」
さっきの威勢は何処へやら、ラプトルはジリジリと後退している。
一方、ヒー郎は相手の出方を窺(うかが)っている。
ガリガーリはというと、周囲を見渡して謎の解明に一生懸命だ。
そんな状態が続く中、ついに1頭のラプトルがナイフ爪を出して突っ込んできた！
「！・・・来たか！！」
ヒー郎は迎撃(げいげき)の体勢に入る。

※【迎撃】（げいげき）・・・攻めて来る相手を迎え撃つこと。

9頭ほどのラプトルが見守る中、攻めに行ったラプトルはどんどんヒー郎に近づいていく。
ヒー郎は、剣を鞘(さや)に収めたまま柄(え)の部分を持って、相手が適正距離まで来るのを待っている。
小刻みで静かな足音をたてて突進するラプトルの視線は、一点に集中していた。
そしてヒー郎もまた、真剣な眼差(まなざ)しで視線を一点に集中させている。
ラプトルが、ある地点まで走った時、ヒー郎の目はギンッと輝いた。
「そこだぁぁぁぁぁっ！！！！！」
ヒー郎は柄(え)を握る手に力を込める。
と、その時、
「ちょっと待ってくださぁぁぁぁぁぁぁぁぁいっ！！！！！」
「いっ！？」
突然、聞こえた大声にヒー郎は戸惑って、その隙にラプトルに突進

されてしまった。
「ぐはっ！」
「あっ、すいません。」
叫んだのはガリガーリだった。
「ぎゃあぁ！！　痛っ！！　ぐはっ！！！　あだだだだ・・・いだだっ！！！」
ヒー郎はラプトルに、八つ裂きにされている。
「まぁ、とにかく・・・ラプトルの後ろを見て下さい。アレですよアレ。」
「いたた・・・・・・アレって？」
ヒー郎は、目を凝(こ)らして９頭のラプトルの後ろを見る。
「えぇっと・・・あっ、アレのこと？」
ヒー郎が指さした先にはラプトルの子供が４頭、キーキー鳴いていた。
成体とは違い、全長は１０ｃｍくらい。現状を理解していないのか、小さなクレーターのようなくぼみの中で４頭、じゃれあっている。
「４頭の子供を守ろうとしてたんですよ。だから、諦(あきら)めが悪かったんでしょう。」
「どうでもいいだろ、そんなこと。」
「よくないですよ！　子供を死守していたのなら、追ってくることは無いハズです。余分な体力は使わないことにしましょうよ。」
「っていうかさ、今、俺　現在進行形で体力削られてるんだけど。」
ヒー郎の背後では、未だにラプトルが背中を　ひっかきまくっていた。
「とれば良いじゃないですか。」
「お前が悪いんだろうが。」
そう言うと、ヒー郎は背後のヴェトリクス・ラプトルを殴り倒した。
その後、ヒー郎は剣を鞘(さや)に収め、少し　子ラプトルに近づくと目を細めて言った。
「５頭・・・・・・だろ？　子供。」

「えっ？　４頭ですよ。可愛く、じゃれあってるじゃないですか。」
ガリガーリも子ラプトルに目を向ける。
「いや、じゃれてないのが１頭いるじゃん。奥に。」
「えぇ・・・そんなハズは無いですよ。・・・だって僕、神ですし。」
ガリガーリにも、知識の神としてのプライドがあるようだ。
「じゃあ、見てくればいいじゃん！　ホレ！　行ってこいよ！！」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・い、いいでしょう！！
行ってきますよ！！！　絶対４頭ですからねっ！！！」
すでにガリガーリは目的を見失っている。
子ラプトルの前には成体のヴェトリクス・ラプトルが９頭いたが、
ガリガーリは「ヴェトリクス・ラプトルには、動いていないモノが
背景と区別できない」ことを知っていたため、身をかがめて、ゆっ
くり前進していった。
そして、ゆっくり前進すること数十秒。子ラプトルのいる　くぼみ
　に到着したガリガーリが見たモノは、痩せ細った子ラプトルの死
体だった。
血の気の引いたガリガーリが、さらに　くぼみ　の奥を見ると、そ
こにはまだ痩せ細ったヴェトリクス・
ラプトルの死体が延々（えんえん）と連（つら）なっていた。

※【血の気が引く】（ちのけがひく）・・・顔面などの皮膚の色が
恐怖などのために青ざめること。

「ひ・・・・・・ひいいいいいいいいいいいいいっ！！！」
ガリガーリが思わず悲鳴を上げると、近くのヴェトリクス・ラプト
ルが銜（くわ）えてヒー郎のもとへ投げ飛ばした。
「ぎゃっ」
ヒー郎が慌てて、足下（あしもと）で青ざめるガリガーリを手でつまむ。
「おいおい、どうした！？　何？　何があったん！？」

「もう、もうイヤです！　何なんですかこの山は！！　死体ばっかじゃないですかっ！！！」
ガリガーリはバタバタしながら取り乱している。
「何だか分かんねぇよ。ちゃんと言えって。」
そう言ってヒー郎はガリガーリを振り回した。
「ぎゃあぁあぁぁぁぁあぁぁぁぁああぁぁ！！！　やめて下さいっ！　話しますって！！！」
その後、ガリガーリはヒー郎の右肩に乗って　さっき見たモノについて詳しく話した。
「痩せ細った死体・・・ねぇ。」
「たぶん、飢餓が死因だと思います・・・。」
ガリガーリは、すでに元気がなくなっている。
「俺としては、あの坊主　助けたからどうでも良いんだけど・・・いやぁ、ここまで謎が深まると興味が湧くなぁ。俺こういうミステリーみたいなの好きなんさ。」
「あっ、そうそう。ここまで事実が分かってくると、今までの謎も解けてきますよね。」
力の抜けたような声でガリガーリが言った。
「ヴェトリクス・ラプトルの巣に餓死した死体があるということは、このラプトルの群れは飢餓状態にあったという事ですよね。おそらく何らかの原因で生態系が狂ったんでしょう。すると、ラプトル達は食べ物を求めて山を探し回り、今まで食べなかったような動物も食べるようになります。」
「あっ！　山の動物が食い散らかされてたのはそれが理由か。」
「そうです。でも、ラプトルの群れは１０００頭います。生態系が狂った山では、長く続くハズがありません。そのうち山の動物を全部食べ終わったラプトル達は・・・・・」

「共食い？」
ヒー郎が口をはさむ。
「それは最終手段ですよ・・・。動物というのは、周囲の環境に合わせて移動するものです。
山の食料が底をついたことを知ったラプトル達は、山を下りてきます。そこで、ラプトル達は
食料が大量に眠る場所を探しあてたんですよ。」
「それが・・・・・ステイゴーの牧場か。」
「これで、謎は解けましたね？」
「おぉ！　スゲー！！　なんかスッキリした！！！　さすがじゃん。わーいわい。」
喜んで　はしゃぐヒー郎を横目に、ガリガーリはため息をつく。
さすがに今日は死体を見すぎて気分が悪いのだろう。

「あっ」
突然、ヒー郎が何かに気付いて、ガリガーリに質問した。
「まだ謎が１つ残ってるだろ。」
ガリガーリは、ヒー郎に背を向けたまま固まっている。
「『何らかの原因で生態系が狂った』って言ったけどさぁ、その”何らかの原因”って何だよ。」
ヒー郎が言い終わると、ガリガーリは背を向けたままニヤリと笑った。

「そうですよ・・・・・・。ここからが貴方の仕事ですよ！！！」
振り向くと同時に大声で言い放つガリガーリ。
「・・・あ、いいや。今の聞かなかったことに・・・・・・。」
「そうはいきませんよ！！　ヒー郎さんっ！！！」

ガリガーリはヒー郎のほっぺをつねる。
「痛たたたたっ！」
「僕の推理から察するに、これは明らかな”災い”です。災いのある所にそうっ！！！　災獣は　いるんですよ！！！！！！」
ガリガーリは　かっこよくポーズを決める。
「いないじゃん！　どこにもいないじゃん！　探してもいなかったじゃんっ！！」
ヒー郎は、もう疲れたらしい。
「まだ説明してなかったですね。すいません。災獣っていうのは、何かに擬態してるモノなんですよ。」

※【擬態】（ぎたい）・・・他のモノの様子や形に似せること。

「擬態？」
「そうです。今、この状態で”おかしいこと”があるハズです。それに擬態してるんですよ。」
「お・・・おかしいこと？」
ヒー郎は辺りを見渡す。
「無いだろ、そんなん。」
諦めが早い。
「現在のことじゃなくても、さっきのこととか、だいぶ前のこととか、何かしらあるハズです！」
ヒー郎は腕を組んですこし考える。
「あのさ、お前、なんか知ってんじゃねぇの？」
ガリガーリに問いかけた。
すると、自信満々に答えた。
「そりゃ知ってますよ！！　僕はなんでも知ってる神ですから。」
「じゃ、教えてくれてもいいじゃん。」
「あー、ダメダメ。それ教えるとエルゼス様に怒られちゃいますから。」

ガリガーリは即答した。
「”エロデス”って誰だよ！！」
「”エロデス”じゃなくて”エルゼス”ですよ！！　僕の上司で、全能神です。　エルゼス様知らないなんて・・・」
言いかけたガリガーリにヒー郎が口を挟む。
「どーでもいいよ！！　フザけたことぬかしてんじゃねーよ！！もっ帰るぞ俺！！」
そう言ってヒー郎が振り返ると、
「いいんですか？　王様にコキつかわれるようになっても。」
「う。」
後ろから暗くキビシー声が。
「・・・・・チッ」
ヒー郎は再び振り返った。
「じゃあさ、せめてヒントとか無いの？」
ヒー郎に指摘されたガリガーリは、少しの間考えると、困った顔で言った。
「じゃあ、ヒントだけなら良いでしょう。・・・・・1回しか言いませんよ。」
ヒー郎は、1回のヒントを聞き逃すまいと耳を傾ける。
「想像して下さい。ヴェトリ・・・」

説明しだしたその刹那（せつな）、突然近くから岩盤が崩れる大きな音が！！
突然聞こえてきた轟音に、ヒー郎達は思わず音源（おんげん）を見る。
すると、そこには巣穴の壁を破壊して出現した大型肉食竜の姿があった。
「な・・・何だ何だ！？」
ヒー郎は慌てふためく。
「あれは・・・！！　災獣です！！！」
「災獣！？」
ヒー郎はガリガーリを見る。

「擬態してんじゃなかったの？」
「・・・・・・・・・・・・あれ？」
ヒー郎の問いかけに、ガリガーリは首をかしげた。
とにかく、今ヒー郎達の前にいるのは、災獣バシュラス。全長１５ｍほどの巨体を持っており、ヴェトリクス・ラプトル同様に二足歩行をしている。
首の長いティラノサウルスのような姿だ。

＞ｉ９７８２―１４３５＜
（災獣バシュラス）

戸惑うヒー郎に、ガリガーリが呼びかける。
「まぁ、今はそんな事どうでもいいです！　まずはあの災獣バシュラスを倒しましょう！！」
「倒すって、どうやって？」
「えっと・・・け、剣があるじゃないですか！！」
苦笑いしながらガリガーリが答える。
しかし、災獣は相談する時間など与えてはくれない。
ものすごい勢いでヒー郎に突進してきた。
ラプトルとは一味も二味も違う、重量感のある足音がヒー郎に恐怖を感じさせる。
「くっ！」
ヒー郎は、災獣の突進を横にかわした！
バシュラスの突進は壁に当たり、壁の岩が轟音をたてながら一瞬にして崩れ落ちる。
「くっ・・・なんつー馬鹿力だ。」
「動きは遅いですけど、破壊力は凄まじいみたいですね。」
「とにかく、こんな狭い所じゃ　こっちに不利だ！！　外に出るぞ！！」
ヒー郎は走って巣から出る。

そして、それを追ってバシュラスも、遅くも重量感のある足で出口に走っていった。

外に出るなりヒー郎は振り返り、剣を構えた。
巣の入り口の奥からはバシュラスの鳴き声と、大きな足音が聞こえる。
時間の経過に合わせて足音はどんどん大きくなってゆき、それにつれてヒー郎の剣を持つ手に緊張がはしる。
死臭の漂う岩と土だけの景色。洞窟から流れ出る冷たい風。
重く、ずっしりとした足音が、一瞬だけ軽い音に変わった。
入り口から、洞窟全体を轟かせる雄叫びが響く。
次の瞬間、暗闇の中から大口を開けたバシュラスが現れ、ヒー郎は大きく剣を振った！
「食らえやあぁぁ！！！！！」
振り下ろされた剣は的確にバシュラスの喉を突く。
しかし、バシュラスの表皮は硬く、怯みもせずに突進を続けた。
「何ィ！！！」
ヒー郎は咄嗟に盾を構えるが、バシュラスの突進の威力は凄まじく、防御には成功したものの後方に大きく吹っ飛ばされた。
広がる砂埃。
「大丈夫ですか！！？」
ガリガーリが駆け寄る。
ヒー郎は左肘を押さえながら上体を起こし、言った。
「痛つつ・・・あのさ、災獣ってみんな硬いの？」
「えっ？　まぁ、大概硬いですよ。」
それを聞いてヒー郎は面倒臭そうな顔でため息をついた。
「やる気出して下さいよ！！　ホラ、戻ってきましたよ！！」
３０ｍほど先にはバシュラスの姿が。
「チッ・・・剣が効かないヤツをどう倒せってんだよ・・・。」
ヒー郎が構えたのは、剣ではなく盾だった。

バシュラスは再び突進し、ヒー郎がそれを避ける。
これを繰り返す戦闘を余儀なくされていた。
「ヒー郎さん、こんなこと繰り返してたら　いずれまた吹っ飛ばされちゃいますよ。」
巣穴の上で心配そうにガリガーリが言う。
「だから・・・・・・剣が効かない相手に　どうしろってんだよっ！！！」
ヒー郎は若干キレ気味で避け続けている。
「頭を使いましょうよ。頭を。」
「俺に頭脳を求めるなよ・・・。」
ヒー郎は　やる気の失せた顔で巣穴を見た。
「ん？・・・・・・頭を使う・・・そうか！！」
「頭突きじゃないですよね？」
心配そうにガリガーリが言う。
「そんなんじゃねぇよ！！」
そう叫ぶと、ヒー郎は巣穴に逃げ込み、バシュラスを誘導した。
そして、ヒー郎とバシュラスは大広間で向かい合う。
「へっへっへっ・・・まんまと罠にかかったな。ここは俺の領域だ！！！　さぁ出て来い、ラプトル！！！　災いの元凶はアイツだ！！　かかれえぇぇぇぇぇ！！！！！」

しーーーーーん・・・・・・

「・・・・・。」
ヒー郎は冷や汗を流す。
そんなヒー郎にバシュラスは容赦なく襲いかかった。
「待って待って！！　ちょっとタンマ！！！　ねぇ今の無しでしょ！？」
そう言うとヒー郎は間一髪突進を避け、巣穴から出てきた。
「何で！？　何で出てこないの！？　協力する気ゼロじゃんアイツ

ら！！」
「あのですね、ヴェトリクス・ラプトルは群れで狩りをする動物ですよ。戦えるラプトルは9頭しかいなかったじゃないですか。出てくるハズないですよ。」
「何でそんな減ってんだよ！！」
「貴方が斬ったんでしょ。」
「くそぉ・・・・」
ヒー郎は、巣穴から出てきたバシュラスを睨(にら)みながら頭を抱えた。
「まぁ、気を取り直して別の方法を考えましょう。相手の攻撃を利用するとか。」
ガリガーリは余裕(よゆう)そうである。
「相手の攻撃を利用？　また面倒な・・・・。」
盾を構えるヒー郎に、バシュラスはまた突進をかける。
ヒー郎は、やはりそれを避けた。
バシュラスはそのまま走りぬけ、２０ｍほど走ると減速し、振り返ってまた突進の体勢に入る。
それを見ていたヒー郎は、何やらブツブツとつぶやいた。
そして不敵に笑い、
「・・・・・・なるほどな。」
そう言ってヒー郎は、剣を構えた。
「やってやろうじゃねぇか！！」
「その意気です！　ヒー郎さん！！」
バシュラスは雄叫びをあげると、再び突進を始めた。
するとヒー郎は、剣を持ったまま突進してくるバシュラスに向かって走っていく。
重くずっしりとした足音と、間隔の短い小刻みな足音が周囲一帯に響き渡る。
そして、ヒー郎とバシュラスとの距離が一定以下に達したそのとき、ヒー郎は急に左にずれ、姿勢を低くした。

「ひっかかったなこのクソ・・・」
笑みを浮かべて叫びかけたその時、ヒー郎の目の前に突如、木の棒を持った子供が現れた。
「ちょっ・・・坊主！！？」
現れたのはキレ太だった。
キレ太は怯みもせずに棒を構える。
その棒は微妙にパワーアップしており、先端が尖って槍の様になっていた。
「コイツだ！！　コイツがさなえちゃんを攫(さら)ったんだ！！！」
（えっ、ちょっ、この子何言っちゃってんの？）
ヒー郎は突然の出来事に唖然としている。
すると、キレ太は槍をバシュラスに向けて大声をあげながら走っていった。
「うわあああああああああ！！！」
それに応えるかの様に、バシュラスも大気を震わす雄叫びをあげながら突進し始める。
片や猛突進を武器とする巨体の災獣、片や木製の槍を持つ子供。
力の差は明確だった。
二者の距離はどんどん縮まっていく。
「ヒー郎さんっ！！」
「分かってる！！！」
ヒー郎は盾を突き出して走り出した。
「僕が、僕がさなえちゃんを助けるんだぁあ！！！！！」
叫ぶキレ太と猛突進をするバシュラスとの距離はあとわずか。
しかし、ヒー郎と二者との距離は、間に入るには遠すぎる。
「ちぃっ！！！」
ヒー郎は咄嗟(とっさ)に盾を捨てると、それに向かって剣を思い切り投げつけた。
「ちょっ、ヒー郎さん！！　剣を当ててもバシュラスはびくともし

ませんよ！！！」
ガリガーリの助言は遅かった。
剣を投げたヒー郎は一気に失速。
回転しながら勢いよく飛んでいく剣は、頑丈なバシュラスに向かっていく。
目を瞑って槍を突きつけるキレ太。
その槍はバシュラスのアゴを突いたが、いとも容易く折れてしまった。
それに対し、バシュラスは何事も無かったかのように猛突進を続ける。
バシュラスの大きな牙の1本がキレ太の額をかすったまさにそのとき、何かの衝撃でキレ太は足から仰向けに倒れた！！
突如として倒れたキレ太に対応できず、バシュラスはそのまま通り抜けていく。
「なるほど・・・凄いテクニックですね・・・。」
顔中冷や汗のガリガーリは、唖然としながらも感心した。
ヒー郎はバシュラス目掛けて剣を投げたのではなく、キレ太の足を狙っていたのだ。
回転しながら飛んでいく剣の、柄の部分をうまく踵にぶつけて転ばし、姿勢を低くさせる事でバシュラスの突進をかわさせたのだった。
ヒー郎はすぐさまキレ太のもとに飛んでいく。
「おい坊主！！　テメェ勝手な事してんじゃねーぞ！！！」
大きな声で怒鳴ったが、キレ太は臆せず言い返してきた。
「何で、何で邪魔するんだよ！！！」
ヒー郎は予想外の言葉に返す言葉が思い当たらなかった。
「アイツがさなえちゃんを攫ったんだ！！　アイツが悪者なんだよ！！　邪魔するなぁ！！！」
キレ太は暴れ始める。
ヒー郎は止めようと押さえつけるが、聞く耳持たずに折れた槍を振り回した。

「待て、ちょっ、落ち着け！！」
「嫌だっ、僕は戦うんだ！！！　さなえちゃんを助けるんだ！！！」
ヒー郎が必死に押さえつけているさなか、暴れるキレ太の持っていた槍がヒー郎の頬をわずかに斬った。
「ぐあっ！」
痛そうに傷口を押さえるヒー郎に驚き、キレ太は動きを止める。
「あっ・・・・・・ご、ごめんなさい・・・。」
ヒー郎はしばらく傷口を押さえていたが、少し経つとうつむいたままキレ太に言った。
「へっ・・・こんなん屁でもねぇよ。」
ヒー郎は傷口から手を離し、今度はキレ太の目を見て話を続けた。
「いいか、もう、みなほちゃんを追うのはやめろ。」
「さなえちゃんだよ。」
「そう、それだ。それを追うのはもうやめろって言ってんだ。」
すると、キレ太は少し強めに問いかけた。
「何で？　何で友達のために戦うのがだめなの！？」
「そういう事を言ってんじゃねぇ、時には逃げる勇気も必要だっってんだよ。」
ヒー郎は一瞬だけ、周囲の死体に目を向ける。
「お前にとってみちるちゃんが大切な様に、あの親父にとってもお前は宝なんだよ。」
「でも・・・でも僕はさなえちゃんを助けて帰るんだ！！　僕にとってさなえちゃんは宝なんだもん！！」
ヒー郎は舌打ちすると、キレ太の両肩に力強く手をあてて、キレ太の目を強く見て言った。
「いいか？　よく聞け！！　ほのかちゃんは・・・・・・っ！！！」
キレ太を説得する方法はもうこれしか無いと悟ったのだろう。ガリガーリも両手を合わせてただただ祈っている。
ヒー郎は辛そうに、しかし今までで一番力強く、真正面からキレ太に言い放った！！

「アイツはっ！！　もういないんだよっ！！！」
その後、少しの沈黙が辺りを包む。
が、すぐにその沈黙は破かれた。
キレ太は大して悲しむそぶりも見せずに言う。
「そうだよ、だから探してるんじゃん。」
「ち、違う！！　そういう意味じゃねぇ！！」
続けて説明しようとするが、ガリガーリが口を挟む。
「ヒー郎さん！　バシュラスが！！」
ヒー郎が後ろを振り返ると、猛突進で走ってくるバシュラスの姿が。
「ちぃっ！！　おいガリガリ、坊主を頼んだ！！」
「？　僕の事ですか？」
「お前しかいねぇだろ！！　他に誰がガリガリなんだよ！！！」
「あの、僕はガリガーリ・・・」
「うっせぇ！！！　さっさと坊主隠れさせろ！！！」
ガリガーリに木片を投げつけて無理矢理キレ太を預けると、ヒー郎は剣を構えて戦闘体勢に入った。
「テメェの相手は俺だ！！　かかってこいやあ！！！」

山の頂上付近の平地でヒー郎がバシュラスと戦っている間、ガリガーリはキレ太を連れて隠れ場所を探していた。
キレ太は子供とはいえ、虫であるガリガーリよりは何倍も大きいのだが、ガリガーリのお尻から出ている
光る糸が手首に巻き付いているため、ついて来ざるをえなくなっていた。
ガリガーリは空を飛びながら隠れ場所を探している。
一方、キレ太はといえばさっきから放せ放せとわめいていた。
「もう少しです！　さなえちゃんは僕達が・・・その、任せて下さい！！　だからちょっと落ち着いて・・・」

「嫌だ嫌だ！！　早くさなえちゃんを助けないと・・・さなえちゃんがぁ！！」

そんな調子で探し続けた結果、結局まともな隠れ場所は見当たらず、さっきのラプトルの巣で隠れることに。
巣の洞窟に向かう最中、村の方角に見える夕日は真っ赤に輝き、すでに沈みかけている。
着いた頃には、キレ太もすっかり叫び疲れて静かになっていた。
周囲にはラプトルが９頭ほどいたが、すでに群れは崩壊しているため、仲間の看護に集中している。
しばらくの間は何も会話らしい会話は無く、ただただ忙しそうにラプトルが駆け回る音だけが広い壺の様な空間に響き渡っていた。

大広間の天井に開いた穴からは月明かりがこぼれている。
いつの間にか、夜になってしまったらしい。
とても静かだった。　ガリガーリはヒー郎を心配しながらも、地上の世界の神秘に心を奪われている。
すると、その長い沈黙を破って、すぐ隣から子供の声が聞こえ始めた。
「こんな夜中でも、お父さんたち僕のこと探してくれてるのかな・・・。」
声はキレ太のものだった。夕方とは打って変わってどこか寂しげに感じられる。
そんなキレ太にガリガーリは優しく答えた。
「もちろんですよ。お父さんも、村の皆さんも、きっと心配してるはずです。　それは、キレ太さんが　さなえちゃんを心配する気持ちも分かります。　でも、それ以上にキレ太さんの存在が村のみんなにとって大切なんですよ。　ですから・・・」
「結局、動物より人のほうが大事なんだよね。」
ガリガーリの言葉を割ってキレ太が一言もらす。

「えっ？」
「だってそうでしょ。　何で僕ばっかり心配されて、さなえちゃんのことは誰も考えてあげないの？」
キレ太の言葉は静かだったが、強い感情が入っていた。
「さなえちゃんは、ひとりぼっちだったんだ。　お母さんから見放されて、僕がお母さんになってた。　だけど、最初は捨てられる予定だったんだ。　育てるのは難しいからって。　でも、何で？　何で人間の赤ちゃんは危なくても全力を尽くすのに、動物はすぐ”捨てる”なんて言えるの？　ねぇ何で？」
「そ、それは・・・」
キレ太の主張に、ガリガーリは返す言葉が見当たらなかった。
再び、大広間が静寂に包まれる。
気が付けば、隅で看護をしていたラプトルも寝付いてしまっていた。
「でも・・・」
ガリガーリがふと言い出す。
「でも、少なくともお父さんは、さなえちゃんの事も気にしていたと思います。」
「いいよ、そんなの。　さなえちゃんは僕が守るから。」
「奇麗事じゃありません。　本当なんですよ。　証拠だってあります。」
そう言うと、ガリガーリは微笑みながら、木片を取り出した。
いや、木片ではない。木箱だ。
とても粗末な作り。　大小バラバラの木材を、ただ箱の形にして釘を打っただけ。　即席で作ったような箱だった。
「何これ？」
手渡されたキレ太は、不思議そうに色んな角度から箱を見つめている。
「山に行く前に貴方（あなた）のお父さんから預かった物です。　さぁどうぞ、開けてみて下さい。」
キレ太は、箱の隅に見つけた鍵代わりの牧草を解（ほど）き、木箱を開けた。

「これ・・・」
キレ太は中身を取り出した。　手綱だ。
※【手綱】（たづな）・・・馬とかの口によくついてるあのヒモ。
皮で作られていたが、縫い目はひどく粗(あら)い。
しかし、サイズだけはぴったし、さなえの体に合っていた。
「手綱をつけられるステイゴーは、運搬の役割を持っています。
より多くの荷物を運ぶために、成体しか採用されません。　キレ太さん、このサイズの手綱は、どこを探しても売ってる物では無いんですよ。」
ガリガーリは、うつむくキレ太の横顔を優しく見つめて言った。
キレ太は、なにも言わずに、ただしばらくの間手綱を手に黙り込んだ。
再び、ガリガーリは天井の穴を見つめだす。
満月。　そして夜空に散らばる数多の綺羅星(きらぼし)。
暗黒に思えていた”夜”は、決して暗黒などではなかった。
太陽。　それがどんなに遠い存在でも
太陽の光。　それが直接目に見えなくても
それは周りの星たちによって、地球の裏側にいる僕らのもとまで届けられるのだ。

「・・・・・・僕、帰るよ。」
ふとキレ太が囁(ささや)いた。
「理解してくれて嬉しいです。　帰ってあげて下さい。　皆さんは、貴方を待っていますよ。」
ガリガーリは、やさしく微笑んで、光る糸を外した。
それと同時に、キレ太は手綱をしっかり抱えて洞窟の出口に向かって走り出す。

するとその時、バシュラスが開けた穴からヒー郎が全速力で入ってきた！！
「あっ！！　ヒー郎さん、無事だったん・・・」
「逃ぃぃぃぃぃぃぃぃぃぃげろぉぉおおおおおおお！！！！！」
叫ぶヒー郎。
次の瞬間、穴を粉砕してバシュラスが突進してきた！！
「ちょっ！！！」
これにはガリガーリもびっくり。
しかし、ただ驚いているワケにもいかなかった。
ヒー郎はうまく横によけたものの、勢いあまったバシュラスの突進ルートの先にはキレ太が！！
必死に逃げるキレ太。　しかし、岩盤を粉砕するほどに加速したバシュラスに敵うはずもなく、みるみるうちに距離が縮んでいく。
キレ太が避けた岩やら死体やらの障害物を突き飛ばしながら、大地を揺るがし急接近していくバシュラス。
「キレ太さん！！！」
ガリガーリは咄嗟の判断で、光る糸を勢いよくキレ太に飛ばした！！
飛ばされた糸はキレ太の手首をしっかり捉えると、瞬時にガリガーリのもとへ引き戻した。
それと同時にバシュラスは壁に激突し、自らが起こした落石にのまれる。
「ふ・・・ふぁぁ・・・助かったぁ・・・。」
涙目のキレ太を介抱しているガリガーリに、ヒー郎が近寄ってきた。
「おいガリガリ、どうなってんだ！？　俺もアイツも。」
「どうかしたんですか！？　ヒー郎さん何か気付いたんですか！？」
「何とぼけてんだ・・・。　見れば分かるだろ！！　なんか知らないけど俺、めっちゃ　き　ら　び　や　か　になってんだけど！！？」

ヒー郎の体は、観音様(かんのんさま)を連想させる黄金色にピカピカ光っていた。・・・無意味に。
「あぁ、発動したんですね。　せとぎわパワー。」
「せ・・・せとぎわパワー・・・？」
平然と聞きなれない単語を言い出すガリガーリ。　ヒー郎は嫌な汗を垂らしている。
「あっ、説明してませんでしたっけ？　せとぎわパワーっていうのは、ピンチのときに自動で発動する細胞変換のことです。　脳がピンチと判断すると、細胞組織が変換されて何かしら起こるんです。」
「・・・で、このピカピカは一体なんの意味が・・・？」
「えっ？　ありませんよ？」
あっさりと。
「えっ、意味ないの？」
「はい、ありません。」
「じゃあなんでわざわざピンチのときに光るん？」
「ですから、何かしら起こりますが、大抵の場合は弱くなるんですよ。」
疑問が疑問を呼ぶ。
「いや、俺こんなの初体験なんだけど。」
「当たり前じゃないですか。　今朝の朝食のときにお薬飲ませたんですから。」
ヒー郎は”今朝の朝食”を思い出す。
何故か朝食の中に入っていたガリガーリ、それを思い出した。
「・・・・・なんで飲ませた・・・。」
若干怒った顔。
「いやだって、ヒードラ戦のとき苦戦してたんで、何か力になれないかなぁ・・・って思いまして。」
「いやいや、弱くなるんだろそれ？」
「いやいやいや、たまに強くなりますよ。」
「いやいやいやいや、”たまに”ってことは、ほとんどの確率で弱

くなるってことだろ？」
「そうですね。」
あまりに淡々と意味不明なことを言い出すガリガーリにヒー郎はプッツンきた。
「そうですね、じゃねーーよ！！！　余計なモン飲ましてんじゃねーよ！！　ぺっぺっ！！」
そんな会話をしていると、多数の大きな岩を吹き飛ばしてバシュラスが復帰しだす。
ガリガーリはバシュラスを見るなり、真剣な表情でヒー郎に伝えた。
「そんなことよりも重要なのは災獣の状態です。　ヒー郎さんも気付いてらっしゃるとは思いますが、現在のバシュラスの状態は正常ではありません。」
持ち前の怪力で周囲の岩を突き飛ばしているバシュラスの体は、漆黒に染まり、体の中心から外側に向かって勢いよく赤い粒子が噴出している。
「災獣というのは、ピンチになると体が黒ずみ、赤い粒子を放出し始めます。　こうなってる間は判断力と引き換えに災獣の能力が上昇し、この状態のことを”バーサーク状態”といいます。」
「俺のは能力上昇しないのか？」
「しません。」
ヒー郎はまだ”せとぎわパワー”のことを引きずっているようだ。
ガリガーリは気にもせず説明を続ける。
「バシュラスの場合バーサーク中に上がるのは、破壊力と突破力と俊敏性と恋愛運です。」
「恋愛運て・・・・・・。　でも、確かにいきなり強くなったな。」
「気をつけて下さい、ヒー郎さん。　そろそろ出てきますよ。　判断力が鈍るというデメリットを狙いましょう。」
ガリガーリの忠告の後、全ての岩を吹き飛ばして、バシュラスの拘束が解かれた。
すると、天に向かって大音量の雄叫びをあげる。

雄叫びが洞窟全体に響き渡り、漆黒に染まったバシュラスはヒー郎を睨みつけた。
ヒー郎も負けじと睨み返す。
「・・・俺にガンつけるなんて１００万光年早ぇんだよ。」
「ヒー郎さん、光年は距離の単位です。」
ヒー郎はガリガーリの指摘を何食わぬ顔で無視すると、キレ太のもとへ走っていった。
「よし、開けたな。　そして中身も案の定だな。　俺の隙間見るテクすげー！！」
そんなことを言っていると、背後から物凄い勢いでバシュラスが突進してきた。
「坊主っ！！　危ない！！」
キレ太を抱きかかえて転がり避ける。
突進を外したバシュラスは大きくドリフトし、突進第2波にうつる。
「坊主、これ借りるぞ！！」
ヒー郎の手には、いつの間にやら手綱が。
「えっ？　あっちょっ、まっ！！」
「大丈夫大丈夫、ちゃんと返すって。　お前の父ちゃんの誕プレが、世界の役に立つんだぜ。」
抵抗するキレ太。　しかし、目の前にはバシュラスが。　凄まじきヒー郎の策略。
「すいませんキレ太さん。　でも、ここは僕らで何とかしますんで、キレ太さんは早く！！」
「うっ、うん。」
ガリガーリの説得でキレ太は出口から出ていった。
フェニックスブレードを振ってバシュラスの注意を引いていたヒー郎は、キレ太の脱出を確認すると、一目散に穴から出ていく。
「ガリガリ！！　そいつを足止めしてろ！！」
出て行きざまの急な要求。
「えっ！？　ちょっ、そんな急に・・・っ！！」

急かされたガリガーリは慌ててバシュラスに光る糸を飛ばす。
飛ばされた糸はバシュラスの足に巻きついたものの、圧倒的な力でガリガーリが飛ばされてしまった。
「ヒー郎さんごめんなさい無理でした〜（泣」
地響きをたてながら猛進していくバシュラス。　ヒー郎の通った穴をさらに粉砕し、巣から出てヒー郎に向かって一直線に突進する！！
「来いやぁ！！　正々堂々、タイマンで勝負しやがれ！！！」
熱剣を勢いよく構え、怒鳴るように宣戦布告するヒー郎。
それに応えるかのように、大口を開けたバシュラスの突進は今までに類を見ないほどの猛スピードにまで加速する。
周囲に響く地響きの間隔はすでに１秒もない。
風を切り、低い轟音をたてながら、そのスピードはついに殺人レベルにまで達した。
熱剣を固く握るヒー郎。　来たるべきその一瞬を逃せば、命は無い。
ヒー郎は、ゆっくりと熱剣を振り上げる。
すると、重く、ずっしりとした足音が、一瞬だけ軽い音に変わった。
「今だぁぁぁぁああああぁあぁぁあぁぁぁぁあぁぁぁああああああ！！！！！」

スカッ

「ちきしょおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

ここ一番の重要局面において、爽快なまで見事に外したヒー郎。

剣の先端とバシュラスの顔面の距離、５ｍ。

「いや開き過ぎでしょう！！」

思わずツッコんだガリガーリだが、次の瞬間、有無を言わさず殺人突進がヒー郎を襲った！！

「うわっ！！　ヒー郎さん！！！」

びょ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ん

「・・・・・・・・・・・は？」
反射的に顔を手で覆っていたガリガーリ。　突如響いた変な音に疑問符。
見ると、大口を開いたバシュラスが何かに引っかかっている。
「なるほどな。　判断能力の低下ね。」

ふと聞こえてきた若い男の声。
ガリガーリの見た先、声の主はヒー郎だった。
「こんだけ丈夫に作ったのにも、理由があるんだろうな。」
バシュラスが引っかかっているのは、キレ太の手綱（たづな）。
両端を適当な岩に括（くく）りつけて、真ん中の部分でしっかりと、大口を開けるバシュラスの下アゴを捕らえている。
「・・・ヒー郎さん？」
不安そうな目でヒー郎を見つめる。
「安心しな。　アイツの弱点は見破った。　決着（ケリ）をつけてやんよ。」
そう言うと、ゆっくりと熱剣をふりあげる。
すると、今まで赤く高熱を放っていただけの刃に紅蓮（ぐれん）の炎が纏（まと）い始めた。
「これは・・・！！」
燃え滾（たぎ）る炎を見て驚くガリガーリ。
「”記憶が無くなる前の俺”直伝の必殺奥義・・・・・・！！」
ヒー郎は勢いよくバシュラスに飛び掛った！

「鳳凰乱舞（ほうおうらんぶ）！！！！！」

前方に突きつけた剣の炎がヒー郎に燃え移り、その剣先は一寸の狂いも無く見事にバシュラスの口内を捕らえた。
通り抜けるように貫通したその後には、全身轟炎に包まれ藻掻(もが)き暴れるバシュラスの姿が。

「外は硬くしても、口はどうしても柔らかくなくちゃいけないからな。」
背後のバシュラスに諭すように言い掛けたヒー郎。
満月の夜の轟炎に照らされ、その姿は一段と雄々（おお）しく見えた。

一部始終に見入っていたガリガーリ、ここで何か我に返ってヒー郎に叫ぶ。
「あっ、そうですヒー郎さん！！　これより災獣の封印を開始しますんで、それ以上傷つけないで下さいね！！」
「は？　封印？」
答える間もなく、ガリガーリは天に手を掲げて、大声で叫びだした。

「い　で　よ！！！　轟　炎　の　神　エ　ル　ム！！！」

すると１０分後、夜空の彼方から、真紅に染まる巨大な竜が姿を現した！！
２０ｍはあろうかという長い体に、頭部に生える４本の角。
大きく広げた翼をゆっくりと羽ばたかせ、ガリガーリの背後で静かに止まると、全身を使って甲高い雄叫びをあげた。

>i97783―1435<

（轟炎の神エルム）

その雄叫びは周囲の地形によって複雑に反響し、その悪音にヒー郎は思わず耳をふさぐ。

「う・・・うるせぇ・・・。」

しかし、その悪音は見事にバシュラスも怯ませた。

「エルム！！　飢餓の化身バシュラスを封印せよ！！！」

ガリガーリが力いっぱい叫ぶ。

エルムは高々（たかだか）と雄叫びをあげると、口を大きく開き勢いよくバシュラス目がけて真っ白に輝く極太の熱線を発射した！！！

鳴り響く轟音に大地が揺らぎ、地面を削って放射される超高熱の光線。

その神々しくも圧倒的な力は、辺りの地形ごとバシュラスを包み込み、一瞬にして全てを消し灰へと変えた。

直後、さっきまでの近所迷惑大音量がウソのように静まり返る。

ヒー郎は耳を塞（ふさ）いだまま、唖然としていた。

「・・・・・・さて、封印完了。　エルム、もう帰っていいですよ。」

ふと口を開いたガリガーリ。　それを聞き入れたエルムは、徒歩で山を降りて帰っていった。

「飛んで帰れよ、ハネあんだろうが。」

唖然としたままヒー郎が呟（つぶや）いた。

「さっ、ヒー郎さん、僕たちも帰りましょうか。」

「えっ？　あぁ。」

「ふふっ、ヒー郎さんびっくりしましたか？　こう見えて僕、エルゼス様の直属の部下なんで、僕自身の部下もかなりいるんですよ。」

嬉しそうな笑顔で話すガリガーリだが、そこではない。

ちょっとしたガリガーリのボケで我に返ったヒー郎は、やはり笑顔

で返した。
「おう、じゃあ帰るか。　キレ太の坊主も心配だしな。」
「あっ！！！」
突然、ガリガーリが何かに気付く。
「？　どうかしたか？」
「・・・・・・さなえちゃん・・・。」
「あ・・・・・・。」
2人して暗い顔になる。

「・・・・・・そう、あれだ、その、よしっ！！　新しい冒険の始まりだ！！！」
そう言って村と逆方向に歩を進めだすヒー郎。
「いやいや、報告しなきゃダメでしょう。　このままじゃ食べられて死んだとか何だとか、変な噂が広がりますよ。　英雄も何も無くなっちゃいますし。」
「う・・・。　噂もあれだけど英雄の名が廃(すた)るのは特に困る・・・。」
ヒー郎は足を止めて考え出す。
「ヒー郎さん、ここはキレ太さんのお父さんに説明してもらった方がいいかと思います。」
ガリガーリの提案に少しの間考えたヒー郎だったが、結局考えがまとまらず、賛同することにした。

村へと続く帰り道。
ほぼ岩と土だけの道なき道というのは相変わらずだが、行くときにはあった大量の死体が消えている。
また、枯れた細い木々も力強く青々と茂っていた。

前にガリガーリが説明したように、災獣の封印に成功すればある程度の被害は再生する。
ヒー郎は、そんなことを思い出しながら、本来あるべきこの山の姿を痛感していた。
山を下り始めてから数分。　ちょうどキレ太たちの村が見えてきた頃、遠くから人の声が聞こえてきた。
「英雄様だー！！　英雄様が帰ってきたぞヒャッホウ！！！」
その声を聞いて、村のみんなが続々登場してくる。　そしてみんなでヒャッホウヒャッホウ言い始めた。
その中には飛び跳ねながら「ヒャッホウ！！」と歓喜するキレ太の姿も。
「あいつちゃんと帰れたんだな。」
歩きながらヒー郎が言い出した。
「ちょっと強引な戻し方でしたからね。　ヒー郎さんも忘れずに手綱持ってきました？」
「あぁ、お前がなんか呼び出したときの１０分間のうちに回収しといた。」
そんな会話をしながら、ヒー郎達は爽やかな表情でゆっくりと村に入っていった。
すると、とたんに村人たちが寄ってたかってくる。
「よう英雄！！　無事だったんだな！！」
「ホントもしもの事があったらどうしようかと・・・。」
「キレ太くんも帰ってきて、うちらで永久に英雄として伝えていきますだ！！」
一人一人の感謝の言葉に、ヒー郎は胸を張って答えていった。
ガリガーリは気付いてすらもらえなかった。　ちょっといじけてた。
そんな中、群がっている村人たちをかきわけて出てきた1人の男が。
「ヒー郎・・・・・。」
出てきたのはキレ太の父親だった。
村人たちは皆自重して半歩下がる。

「この節は、本っ当に！！　ありがとうございました！！！」
力いっぱいの叫びとともに、土下座をする父親。
「あぁ、それよりさ・・・」
「キレ太は、人一倍正義感はあるんだが、経験がない分無謀なしょうのない坊主で・・・。」
「あっ、うん、それは分かったから、くみこちゃんの・・・」
「もう！！　なんとお礼をしていいことか！！！」
聞く耳もたずに泣き出す父親。
それを起点に周りの村人も、ありがたや、ありがたや、と手を合わせて言った。
「人の話聞かないとこ、そっくりですね。　では僕も。　いやぁ、ありがたや、ありがたや。」
「拝むな。」
「てか、まだ観音様だったんですか。」
全身黄金に輝くヒー郎に、ガリガーリが真顔で呟く。
すると、その声に反応してキレ太が走ってきた。
「あっ！！　あのときのむしだ！！　ほらほら見て！！　さなえちゃんいたんだよ！！」

「はぁ！？」

拍子抜けした顔を物凄い勢いでキレ太に向けるヒー郎。
キレ太の隣には、可愛らしい桃色リボンを頭につけた子供のステイゴーがガリガーリを襲っている。
「ぎゃーー！！　やめて下さい！！　痛い痛い！！」
そんな2匹には目もくれず、近付いてきたキレ太は手を出してきた。
「お兄ちゃん、あの　たづな　返して。」
ヒー郎が無言で手綱を渡すと、キレ太はてけてけと走っていき、さ

なえちゃんに装着して喜びだす。
「おい、あの　りえこちゃん　どうしたんだ？」
キレ太の方を向いたまま、近くにいたおばさん村人に問いかけた。
「さなえちゃんのことかい？　いやぁね、キレ太くん探してる最中に、ラプトルの件で村の外に逃げてたのをキレ太くんのお父さんが連れ戻してきて、一緒に探してくれてたんだけど。　それがどうかしたのかい？」
「ラプトル戦で消えたステイゴーは何頭だ。」
「いなかったよ。　全員無事で何よりさ。　あっ、でもさなえちゃんが大事にしてたステイゴーの　ぬ　い　ぐ　る　み　はラプトルが勘違いして持ってっちゃったね。　がっはっはっ！！！」
豪快に笑うおばさん。
「あのヤロー、人騒がせな・・・。」
「まあでも、キレ太さん戻ってきましたし、災獣も1匹封印しましたし、あの山の災いも消えたんですから、良しとしましょうよ。痛て・・・。」
「楽天的なヤツだなぁ。」
「ねぇね」
「あ？」
ヒー郎の足下でキレ太とさなえちゃんが話かけてきた。
「お兄ちゃんもう行くの？　今夜だけでいいから泊まっていきなよ。」
すると、周りの村人も言い始める。
「そうだ、それがいいべ。　旅はそんな焦ってするもんじゃないかんな。」
「んだんだ。　山の様子やラプトルの異常とかに関してもまだ聞いてないし、今夜はご馳走するだ。」
「うほっ、マジで！？　じゃあお言葉に甘えて今夜は飲みに飲ませてもらうぜ！！」
「あっ、酒は無いだよ。」

「え。」

満月の輝くその夜、ヒー郎は村人たちとドンチャン騒いだ。
山の様子に関しては、災獣の事だけうまく誤魔化した以外はしっかりと伝えてラプトルの進攻の心配はもうないことを教えた。
ガリガーリはやっぱり気付いてもらえずにいじけてたが、さなえちゃんのいい遊び相手となったそうだ。　・・・体を張って。
そして、今日1日の疲れを癒すため、明日また頑張るため、みんなは　ぐっすりと眠りながら寝床についた。
・・・・・・ある意味すごいテクニックである。

第４話　さまよいの錬金術師　その１（前書き）

前編と後編の２部に分けると、更新が遅くなる傾向にあるようなので、今回から小刻み更新でいこうと思います。
では、本編をどうぞ。

第4話　さまよいの錬金術師　その1

「うわぁぁああああぁぁあぁぁああああああああああぁぁぁぁぁぁあああ!!!!!」
1人の少年が叫びながら、市街地を爆走している。　・・・大体18歳くらいだろうか。
「連絡した者ッス!!　お願いしまッス!!」
「あぁ、今ちょうど手紙書いてたところだったんだけど、ウチはもう人手は足りててねぇ。　申し訳ないけど他あたってくれないかい?」

「うわぁぁああああぁぁあぁぁああああああああああぁぁぁぁぁぁあああ!!!!!」
さっきの少年が叫びながら、市街地を爆走し尽くしている。　手には茶色い大きな封筒が。
「連絡した者ッス!!　お願いしまッス!!」
「あっ、ごめん。　ついさっき有名大学卒業の子が来たから面接してその場で採用しちゃったんだ。　ごっごめんね、ホントに。　また今度ね。」

「うわぁぁああああぁぁあぁぁああああああああああぁぁぁぁぁぁあああ!!!!!」
さっきの少年が叫びながら、市街地を爆走し果てている。　現代風の短い黒髪で、よくある布の服を着ている。
「連絡した者ッス!!　お願いしまッス!!」
「まことに申し訳ございません。　今回の募集は女性限定となっておりまして・・・・・・。」

「うわぁぁああああぁぁあぁぁああああああああああぁぁぁぁぁぁ

あああああ！！！！！」
そう叫びながら、少年はまた市街地を爆走していった。

ここは、ヤウロッパのお隣の国　”ウエノ・ユラシャーン”　やはり北国なのだが、今までとはうって変わって大都会だ。
周囲には上品な白いレンガ造りの立派な建物がズラリと並び、道路はしっかりと石で補強されている。
見渡す限り、大勢の人々が集まっている。　朝ゆえの通勤ラッシュらしい。
「うわっ！！　のまれる！！　人の波にのまれるーっ！！」
さっそく災い（？）に巻き込まれているヒー郎。　手をバタバタさせて人の波に逆らっている。
「大丈夫、あと少しですよ！！　ヒー郎さんガンバ！！」
空中からヒー郎を応援しているのは、知識の神ガリガーリ。
見た目が、淡く光る緑色のカマキリであるため、誰も神様だとは気付かない。
声も、他の誰かがしゃべっていると考えられているだろう。
「ぎゃあああああ！！！」
ガリガーリの応援もむなしく、人の波にのまれてしまうヒー郎。
残念。
「あちゃあ・・・・・・。」

数時間後、通勤ラッシュもある程度おさまり、人通りも最初と比べると少なくなった。　それでも多いが。
「ここもずいぶんと都会ですが、都心は別の所にあるようですね。」
公園のベンチの背もたれにとまるガリガーリが、辺りを見渡しながら言った。
「そんなんどうでもいいだろ。　いや酷（ひど）い目にあった。」

そうぼやきながら、ヒー郎はベンチで服についたゴミや砂や足跡を払っている。
それを見て、ふふふっと笑うガリガーリ。
「笑ってんじゃねーよ。　てか、お前お供のくせして何にも役にたってねぇじゃねえか。」
「何言ってるんですか。　僕は戦うんじゃなくて、知識を活かして助言する、という重大な役目を担ってるじゃないですか。　知識の神ですよ僕。」
「いやそうじゃなくてさ・・・・・・。」
ヒー郎は腕を組んで難しそうな顔で話を続けた。
「戦うお供ってやつ？　一緒に戦う仲間だよ仲間。　そもそも災獣自体、タイマンで勝てるような相手じゃないんだろ？」
ヒードラ戦でのガリガーリのセリフ、”人間が1人で勝てる相手じゃない”をそのまま返す。
「軍にいた頃は同僚や部下と戦ってたしな。　さっきのラッシュだってお供がいれば流されずに・・・！！」
「ラッシュは関係ないでしょう・・・。　でも、他人に言ったら王様との約束破ることになりますよ。」
「そうだ！！！　広告だよ広告！！　広告だそうぜ、”旅のお供”ってな！！　”○○さぶろう”とか”○○のしん”とか仲間にすれば無敵じゃんうは俺天才！？　じゃ行ってくるわ。」
「あっ、ちょっ！！！　だから約束・・・！！」
止めるガリガーリの話を一切聞かずにビュンッ、と行ってしまった。
「お給料とかどうするつもりなんですか・・・。」
呆れた顔でただ1匹、ベンチに残されるガリガーリ。　残念。

少しして、戻ってきたヒー郎。　話を聞くと、やはり「旅のお供」の広告を出してきたようだ。
「安心しな、ちゃんと広告費は払ってきたから。」

「そうじゃないでしょう。　お給料とか王様との約束とか大丈夫には思えません。」
「大丈夫大丈夫、バレやしねぇって。」
「思いっきりフラグ立ててるじゃないですか・・・。」
余裕なそぶりのヒー郎と、心配そうに説教するガリガーリ。
しばらくの間、お供をとることについて言い合いをしていた2人だが、途中から話題は別の方向へと進んでいった。
「そうそう、ヒー郎さん、この前バシュラスと戦ってたときの話なんですが・・・。」

※【バシュラス】・・・第3話でヒー郎が初めて倒した災獣。　ティラノサウルスの様な姿をしている。

「うん。」
「あの、トドメをさす際に使った”鳳凰乱舞（ほうおうらんぶ）”という奥義ありますよね？」
「あぁ、あれな。　記憶を失う前から使ってたみたいだぜ？　俺が唯一覚えてるやつ。」
「それについて、もっと詳しく知りませんか？」
ぐいぐい身をのりだしてくるガリガーリ。
「えっ？　まぁ、なんだ、熱剣ーフェニックスブレードのカラクリによる熱が一定以上になると、今まで赤く光って熱くなってた刃に火がついて、そのときだけ使える奥義。　んで、使うと体に火が燃え移って、そのまま突進して瞬時に斬りまくる、と。　燃え移っても別に熱かないぞ。」
「ほ、他に何か知りませんか！？　記憶が無くなる前にどこで習得したのかとか！！」
「知らねーよ、気がついたら使えてたんだよ。」
「そうですか・・・。」
期待外れと言わんばかりにガッカリする。

「なんだよ、何か因縁でもあんのか？」
「いやいや、そうじゃないんですけどね。」
ヒー郎は呆れてベンチにおっかかる。
ガリガーリは気が抜けてうつむいたまま。
その間とくに話題が無かったためか、ヒー郎は辺りの様子を見渡し始めた。
時間はまだ朝だが、時刻的にはそろそろお昼。　この辺りに住む人たちが、ちらほらと昼食を買いに出ている。
その様子を見て、ふぅ、と一息。

「　ヒ　ー　郎　さ　ん　っ　！！！　」

「うわっ！！　なんだよ急にっ！！！」
突如、不意に放たれた大声にオーバーリアクションで驚くヒー郎。
「す、すいません。　でも、これだけは確認しておきたくて。」
「・・・なんだよ。」
気の抜けるヒー郎に、ガリガーリは真剣な眼差しで聞いた。
「ヒー郎さんは、”　救　世　主　”　というのをご存知ですか？」
どこかで聞いたことのある単語。　しかし、ヒー郎は特に深追いせずに即答する。
「きゅーせーしゅ？　知らねぇな。　誰だよそりゃ？」
「そうですか・・・。　いやですね、その救世主がいれば世界を完全に救ってくれるそうなんですけど。」
「おぉ、そりゃいいじゃん。　じゃあ災獣討伐は俺じゃなくてそいつに頼めばいんじゃね？」
ヒー郎の問いかけに、難しそうな顔をして答える。
「それがですね、救世主は何年も前から眠っていて、眠りから覚ますには３つのお守りが必要なんですよ。」
「お守り？」

またも、どこかで聞いたことのある言葉が。

「はい、神様を呼ぶことができる伝説のお守りです。　あ、お守りで呼べる神様は僕の部下じゃないですよ。」

ヒー郎は少し考えると、不安そうな顔で言った。

「・・・もしかして救世主って、俺？」

「えっ！！？　ヒー郎さん救世主なんですか！！！！！！！」

突然、大声で叫んで物凄い勢いで身をのりだすガリガーリ。

「い、いや、”眠り”っていうのが記憶のことだったら、”眠りから覚める”ってのは”記憶を取り戻す”ってことであって、記憶を取り戻したら救世主でしたー的な？」

「ちょっ、ヒー郎さんちょっと検査させて下さい！！！！！　ちょっとチクッとしますよ！！？」

ドスッ！！！

「ぐはっ！！！」

どこからともなく取り出したデカい注射器をブッ刺すガリガーリ。

「痛えええええええええええええっ！！！！！　うおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

泣き叫ぶヒー郎など目もくれず、抽出した血液を検査する。

「うおいたああああああああああああああっ！！！！！　ぎょわっ！！　マジ！！！　おhypkしあふydがおytふぉdvぉうgfd寡婦vファg，樹h化；ygt。hf中は。于jdghc。あ；うkjふじこj；hef；u；hefujnへじゅwdskcじゃうgぁysdvふd！！！！！！！！！」

悲鳴が轟く中、検査結果の出たガリガーリは、のたうちまわるヒー郎にこう告げた。

「ヒー郎さん、あなた救世主じゃないですよ。」

ヒー郎は力尽きてぴくぴくしている。

「・・・・・大丈夫ですか？　特殊麻酔付きの注射器なので、チ

クリともしないハズなんですが。」
その言葉を聞いて、ふと我に返る。
「・・・ホントだ。　痛くない。」
「話を戻しますが、とにかく救世主さえいれば世界は災いの危機から救われます。　つまり、ヒー郎さんも自由になります。　ここは一つ、災獣討伐と並行して3つのお守りと救世主本体を探してもらえないでしょうか。」
困ったような表情でお願いするガリガーリ。　その目は冗談ではなく本気の目であった。
「まぁ、俺が自由になるってんなら悪い話じゃねぇわな。　てか並行じゃなくてその救世主復活に全て費やすってのはダメなのか？」
「それはダメですよ。　見つからなかったら災いにのまれますし。」
「あの～・・・」
「いやでも、災獣を封印しまくって後になってから救世主復活させても意味ないだろ？」
「あのっ、あのっ、」
「いやいや、救世主は僕たち神々が総勢探しても未だ見つかってないんですよ？　あくまで”復活できたらラッキー”程度です。」
「すみませ～ん・・・」
「お前なぁ、そもそも俺自体尻拭いで来てんだからこっちの言うこと聞くぐらい普通だろ？　常識考えろバーカ。」
「ちょっといいッスか・・・？」
「選ばれたのが理不尽なんじゃなくて、誰かがやんなきゃならないことなんですよ！！　あとバカって言ったほうが・・・！！！」

「すいません！！！　ちょっといいッスか！！？」

「あんだコラうっせんだよクソガキ！！！」
「黙ってて下さい！！　今真剣な話してるんです！！！」

「う・・・っ、　ごめんなさいッス・・・。」
現代風の短い黒髪で、よくある布の服を着た１８歳くらいの少年は、喧嘩中に話かけたために圧倒されてしまった。
ちなみにその少年の手には、大きな茶色い封筒があった。

第４話　さまよいの錬金術師　その１（後書き）

ぜんっぜん、ストーリー進んでないような気がしますが・・・。
大丈夫、これから進んでいきます！！（汗）

第４話　さまよいの錬金術師　その２

「選ばれたのが理不尽なんじゃなくて、誰かがやんなきゃならないことなんですよ！！　あとバカって言ったほうが・・・！！！」

「すいません！！！　ちょっといいッスか！！？」

「あんだコラうっせんだよクソガキ！！！」
「黙ってて下さい！！　今真剣な話してるんです！！！」

「う・・・っ、　ごめんなさいッス・・・。」
現代風の短い黒髪で、よくある布の服を着た１８歳くらいの少年は、喧嘩中に話かけたために圧倒されてしまった。
ちなみにその少年の手には、大きな茶色い封筒があった。

数十分後、ようやくおさまったドサクサ。　結局、ガリガーリがヒー郎を子供のようにあしらってウマいこと話をそらしたようだ。
「すいませんでしたね。　で、何の用件でしょうか？」
後ろでブツクサ言ってるヒー郎を無視してガリガーリが問いかける。
「・・・・・・？　誰の声ッスか？」
まさかカマキリがしゃべっているとは思わない少年は、きょとんとした顔で周囲を見渡している。
「あ、僕ですよ僕。　あなたの目の前にいるしがないカマキリです。」

その声に誘われて、少年は目の前で飛ぶカマキリをじっと見る。
「・・・・・なんだ虫ッスか。　いや背後霊・・・じゃなくて”目の前霊”でも憑いてるかと思ったッス。」
「”目の前霊”ってなんだよ、背後霊以上に邪魔じゃねぇか。　てか驚けよ、すんなり受け入れるなよ。」
さりげにツッコむヒー郎。　しかし・・・
「えっ！！　僕のこと分かってくれるんですか！！？」
ガリガーリは尋常じゃないほど歓喜している。
「そんなに喜んでくれると、気分良いッス！！　なんか良かったッス！！」
少年も歓喜し始めた。
2人とも喜びながらわいわい話を始め、ヒー郎だけ不愉快な視線を向ける。
「あー、ごほん。　で、何の用だ？　”いい気分”になりに来ただけか？」
「えっ、いや、これ、これ見て来たッス。」
少年が広げて見せたのは、ヒー郎お手製の広告だった。
「あっ、就職希望の方ですね？」
「おいテメェ！！貼った広告勝手に持ってきてんじゃねーよ！！！」
「う・・・っ、　ごめんなさいッス・・・。」
小さくなる少年。　それを見て話が進まないと判断したガリガーリが仕切りなおす。
「・・・・・ってことは、”旅のお供”の仕事を引き受けてくれるんですか？」
「えっ！！？　もう採用ッスか！？」
ものすごい嬉しそうな顔をする少年だが、相変わらず不機嫌なヒー郎が割って入ってくる。
「待て待て。　”○○さぶろう”でも”○○のしん”でもねぇじゃねーか。　常識考えろ、役に立たねーぞ。」
「ヒー郎さん、失礼ですよ！！　こんな早期に来てくれただけでも

充分ありがたいじゃないですか。」
「あの、自分っ、錬金術とか得意ッス！！　学校では科学に限り常に5だったッス！！　きっと役に立ってみせまッス！！！」
妙に力む少年を見て、ヒー郎たちはやや引きぎみになる。
「れ・・・錬金術・・・？」
「科学に、か・・・”限り”・・・？」
少年から怪しい雰囲気が漂いだす。
「怪しい者じゃないッスよ。」
「錬金術師とか普通に怪しいじゃねぇか。　マッドサイエンティストじゃねーのお前。」

※【マッドサイエンティスト】・・・怪しい科学者のこと。大抵悪役。　主人公に協力するのもあるが、それも大体変人。

「とりあえず、履歴書見せてもらっていいですか？　それ履歴書ですよね。」
引き気味のガリガーリだが、冷静にその少年の履歴書を受け取る。
そして見た。

「お名前は、レンキさんですね。　義務教育を終了したあとに3年間程フリーターと。　趣味は・・・錬金術・・・と闘獣ですか。」
「”闘獣”ってなんだ？」
レンキが補足する前に即質問するヒー郎。
「闘獣というのは、好戦的な生き物同士を戦わせるスポーツです。
闘獣士1人につき1匹、3人と3匹同士で戦い、先に相手チームの生き物を全て戦闘不能にした方の勝ち。　国際動植物保護委員会が主催する世界大会も開催される程メジャーなスポーツですよ。
まぁ、ヤウロッパではあまり普及してませんが。」
「その闘獣士ってのが戦うのか？」
レンキが補足する前に即質問するヒー郎。

「いやいや、闘獣士は命令したり生き物の代わりに呪文を言ってあげたりするだけで、実際は生き物同士の戦いですね。　牛同士を戦わせるお祭りが広まったものだそうです。」
「それって錬金術と関係あるん？」
レンキが補足する前に即質問するヒー郎。
「無いですね。　あれ？　レンキさん？」
ガリガーリがレンキを見ると、何やら涙目になっている。
「その・・・とにかく頑張るッス・・・。」
「そうですか、じゃあ時間もないですし、さっそく明日採用試験に入りましょう。」
「えっ！！？　もう採用ッスか！？」
「まだ正社員じゃないだろ。」
そう言って、ガリガーリは明日またこの公園に来ることをお願いして、いったん解散した。

翌日

天気はやや曇り気味だが、暑くもなく寒くもなく丁度良い気温で、野外採用試験をするにはうってつけ。
お昼をすぎた時間だからか、街の人は朝に比べ少ないようだ。　それでもやはり多いのだが。
ヒー郎達はレンキと合流した後、街のはずれにある自然公園へと向かった。
「あのー、ここで何するつもりなんですか？」
おもむろにガリガーリが問いかける。
「あ？　”○○さぶろう”や”○○のしん”並みの腕前なけりゃ連れてく意味ねぇだろ？」
ヒー郎は得意気な顔で進んでいく。

「腕前・・・・・・れ、錬金術の腕前なら自身あるッス！！　あと闘獣とか料理とかも得意ッス！！　調理師の資格も持ってるッス！！」
「んなモンいらねんだよ、こういう腕前見せてみろ。」
突如後ろの茂みの中から飛び掛ってきたヴェトリクスラプトルをヒー郎は振り返ることなく殴り払った。
それを見て完全にビビるレンキ。　うわぁ、と言いながら数歩交代した。
「そそそそそそそれをやるんスか・・・？」
「当たり前だろ。」
レンキは、ぐるりと周りを見渡す。
鬱蒼（うっそう）と茂る木々が覆いかぶさるように視界に入ってきた。
ふと目を近くの濁った川に向けると、何やら鋭い背ビレが水面からのぞいている。
せめて、晴天ならもう少しは綺麗に見えたものの、曇っているため不気味以外に表現のしようが無い。
「無理ッスよ！！　大体何で試験でキョーボーな動物と戦うんスか。」
「お前なぁ、お供ってのは体力が必要なの分かってるだろ？　戦力にならなきゃ意味ないの。　じゃあ始め、アン中にさっきのがいるから。」
「えっ！！？」
怖じ気づきながら茂みに目を向けると、中からゆっくりとヴェトリクスラプトルが現れた。
ちょっと爛（ただ）れ傷があるあたり、さっきヒー郎が殴り飛ばした個体のようだ。
レンキはオロオロしながらも一目散にヒー郎に駆け寄る。
「いやいや！！　自分、武器とか何も持ってないッス！！」
「はぁ！？」
アホみたいな顔でレンキを睨むヒー郎。

「じゃ何で志望したんだ戦う気も無いのに。」
「まさか旅行会社で戦う仕事させられるなんて思ってもみなかったッスよ！」
「・・・旅行会社？」
ガリガーリは、レンキが突然言った言葉を聞き返した。
それに対し、レンキは不思議そうな顔で答える。
「え、だって”旅のお供”って・・・・・・旅行会社じゃないッスか？」
その言葉に、ヒー郎達はキョトンとした。
「あ・・・。」

数分後、街の公園に戻ってきた。　天気は相変わらず曇りだが、人通りは何故か少なくなっている。　数人ポツポツいる程度。
「ヒー郎さんは説明が足りないんですよ。　”旅のお供”って書いてあったら誰だって旅行会社だと思いますって。」
「あー書き直せばいいんだろ書き直せば。」
不機嫌なヒー郎に軽い説教をしつつ、ガリガーリはレンキに謝罪した。
「その、このたびは本当すいませんでした。　こっちの手違いで・・・。」
「いいッスよ、自分も良い夢見れたッスから。」
レンキは、寂しげにポツリと言い残して去っていく。
ガリガーリは申し訳なさそうに手を振り、ヒー郎は余所見をしていた。
薄暗い曇り空の下で、くしゃくしゃの茶色封筒を片手に持った小さい背中がゆっくりと遠ざかっていく。
公園の出入り口を出て、石の国道に足を踏み入れた。
「ちょ待てよ。」
突如、レンキの後ろからあの超有名人の声が聞こえてきた。

驚きながら振り返ると、そこにはヒー郎がいて、レンキはこの世の物とは思えない程のガッカリした表情を見せた。
「な・・・なんスか一体・・・。」
「いや、ちょっと聞いておきたいことがあってな。」
そう言うと、ヒー郎は街の様子を見ながら話しだした。
「この街って、毎日こうなのか？　朝から昼まで人通りが多くて、昼過ぎから一気にこんな減るなんて不自然過ぎやしないか？」
確かに、昨日の朝のラッシュがウソのように現在のこの街には人が数えるほどしかいない。
ドーナツ化現象の影響とかそんなのでは済まされないくらいに激減している。

※【ドーナツ化現象】（どーなつかげんしょう）…都心の地価が高すぎて、あるいは生活環境が悪すぎて、職場が都心にあるにもかかわらず都心からちょっと離れたあたりに住居が多くなる現象。　もちろん職場は都心にある場合が多いため勤務時間になるとみんな一斉に都心へ行き、一日の人口の変化が激しい。

「あー、そういえば最近、金属が全く採れないとかなんとか新聞で読んだッス。」
「それがどうかしたん？」
「マホタメルじゃないですか？」
話に割って入ってきたガリガーリ。　ヒー郎とレンキは2人して頭に疑問符を浮かべている。
「マホタメルという合金の最大の特徴は魔力エネルギーを蓄積しやすいというモノで、魔力を持たない人が日用魔法を使う上で必須と言われています。　一家に一台はある”バッテリーパック”の主成分ですよ。」

※【日用魔法】（にちようまほう）…料理をするために火を起こす

「モエイル」や風呂に水を溜める「ズーツシ」など私達の世界でいう電気・ガス・水道の役割を果たす魔法。　アジアニアという国から伝わり、現在では世界各国で使われているが、もちろん魔力が無いと使えず大規模な動作を長時間行うには相等な魔力が必要なため、マホタメルという合金を主成分としたバッテリーパックを用いるのが最近の主流。　ちなみにこのバッテリー、リサイクルは出来るものの充電が出来ない使い捨て品である。

「そ・・・それ、マホタメルが主成分だったッスか！！！」
いきなり叫びだすレンキ。　直後、我に返って話を戻した。
「とにかく、その”採れない金属”の中にマホタメルがあるなら大変ですよ。　生活崩壊とかいうレベルではありません。　・・・僕たちにはあまり影響ないですけど。」
「自分、錬金術の材料集めとかで色んな金属買うときに聞いたッスけど、マホタメルの材料はどっかの国から買ってるみたいッスよ。」
「輸入ですか。　いやそれなら安心ですけど。」
「一番最後にこの街で採れたマホタメルの材料は、一週間前からマホタメル合金にして区役所に安置されてるって話ッス。」
「あーそうそう、それで思い出したけど俺が昨日、広告貼る許可もらいに区役所行ったら、”貿易先が不況のため全ての輸入ストップ”って記事が夕刊に出てたぞ。」
さらっ、と言ったヒー郎。

笑顔のレンキ。
笑顔のレンキ。
笑顔のレンキ。
レンキは茶色封筒を落とした。　開(あ)いた口が塞(ふさ)がらない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1859l/

せとぎわ神話

2010年10月17日19時25分発行